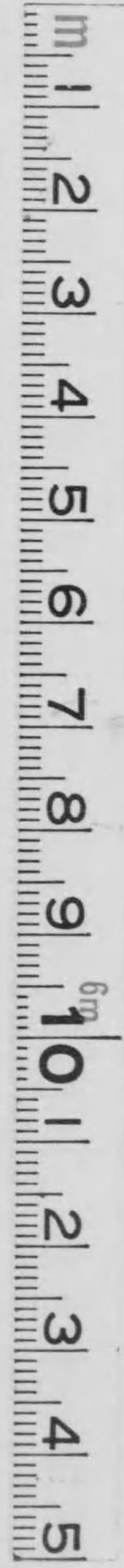


60
524



始



學窓新話

第二頁

大業記

精神科專攻醫學士

高峯博著



良書普及會出版

60-524

學窓新話
第二卷
大東亞

精神科專攻醫學士
高峯博著



大正
8.7.10
長壽書院發行

新學窓

たましひ 目次

第一篇 面白き「たましひ」の研究

- 一、たましひの語義……………一
- 二、たましひの宿り家……………八
- 〔餘白〕心のうた、其の一……………二〇

第二篇 胎兒の腦髓（上篇）

- 一、胎兒の研究はまだ不十分……………二一
- 二、古代の驚くべき醫學的智識……………二六
- 三、古代の醫術は印度が最も發達してゐた……………三一
- 四、胎兒腦の肉眼的所見……………三五
 - 1 體長、體重、腦重等の關係……………三五
 - 2 腦幹を標準とするの説……………四一

目次

目次

〔餘白〕畸形兒の話……………四四

第三篇 胎兒の腦髓（下篇）……………四五

一、腦溝、腦迴轉等の關係……………五四

二、顯微鏡で研究すれば如何に……………六五

〔餘白其の一〕癡者の腦細胞……………六六

〔餘白其の二〕心のうた、其の二……………六七

第四篇 子供の腦髓……………六七

一、子供のたましひは其の運動を見て判すべし……………七〇

二、赤子のたましひの發育經過……………七五

三、幼童のたましひの發育經過……………八三

第五篇 足らはぬたましひ……………八三

一、日本に無き換へ子傳説の醫學的解釋……………八三

1 換へ子の傳説と夢魘……………八三

2 醫學的觀察……………九八

3 其の分布に關する説明……………一一〇

二、恐るべき白癡や變質……………一二〇

1 千軒を焼いた白癡の男兒……………一二一

2 五百軒の酒家からビールを詐取する少女……………一二三

3 一二週間に數千圓横領の秀才……………一二七

〔餘白〕鐘馗撃鬼圖……………一三〇

第六篇 たましひの怪談と迷信 其の一……………一三一

一、離魂病とろくろく首……………一三一

二、古代人や未開人の魂魄觀……………一三三

三、たましひ入れ替りの怪談……………一三六

四、アイヌの迷信「ニタタシ」……………一四三

第七篇 たましひの怪談と迷信 其の二……………一四五

目次

目次

一、七日正月の朝の不思議……………一四五

二、怨魂體を借る話……………一五二

三、蕎麥を喰うた幽霊……………一五八

四、靈魂再來……………一六〇

五、夢裡、亡者と語る……………一六七

〔餘白〕永き戀……………一七一

癡狂院……………一七二

第八篇 狂へる「たましひ」……………一七三

一、巢鴨病院の夜の回診……………一七三

1 夜の狂人……………一七三

2 癡狂院の夜の気分……………一七四

3 狂女の嫉妬と色情亢奮……………一七七

4 悲惨なる痴呆情態……………一八〇

二、精神病者の新年観……………一八三

三、悲惨なる社會的現象……………一九五

1 須磨子と小學生と醫科大學生……………一九六

2 S 副領事と藥屋の小僧とI 醫學士……………二〇六

3 人の心を震す世界風邪(傳染病性精神病)……………二一二

4 學校騒動、米騒動と世界戦争……………二一六

5 結論……………二二七

四、傳染病と精神病との關係……………二二九

五、流行性感冒と精神病……………二三八

1 史的觀察……………二三八

2 其の精神科的研究……………二四三

3 精神症狀の諸觀察……………二四四

4 其の症狀概論……………二五九

5 以上の綜論……………二六六

第九篇 學生の「たましひ」は如何にして荒み行くか……………二六九

目次

目次

一、學生の下宿問題……………二六九
 二、さすらひの身の感想……………二七〇
 三、家庭の愛情……………二七六
 四、下宿と青年……………二八四

第十篇 修養と思索と信仰……………二八九

一、兵法より觀たる學生の受験法……………二八九
 1 火事に逢つた子供の働き……………二八九
 2 幸福なる受験生……………二九二
 3 兵法と受験法……………二九四
 4 兵法と受験的衛生法……………二九七
 5 興味を以てする勉強法……………三〇四
 6 結論と附録……………三〇八
 二、オイツケンの人生觀……………三一—
 三、神を求めて……………三二五

記事人名

索引……………三四一

1 大と我……………三二五
 2 釋迦と耶穌……………三二八
 3 鏡……………三二九
 4 比較論……………三三〇
 5 宗教と評論……………三三二
 6 我も亦孤兒……………三三四
 四、たましひの説……………三三五

挿圖

大脳半球の内側面圖(寫真版)……………

卷頭

目次

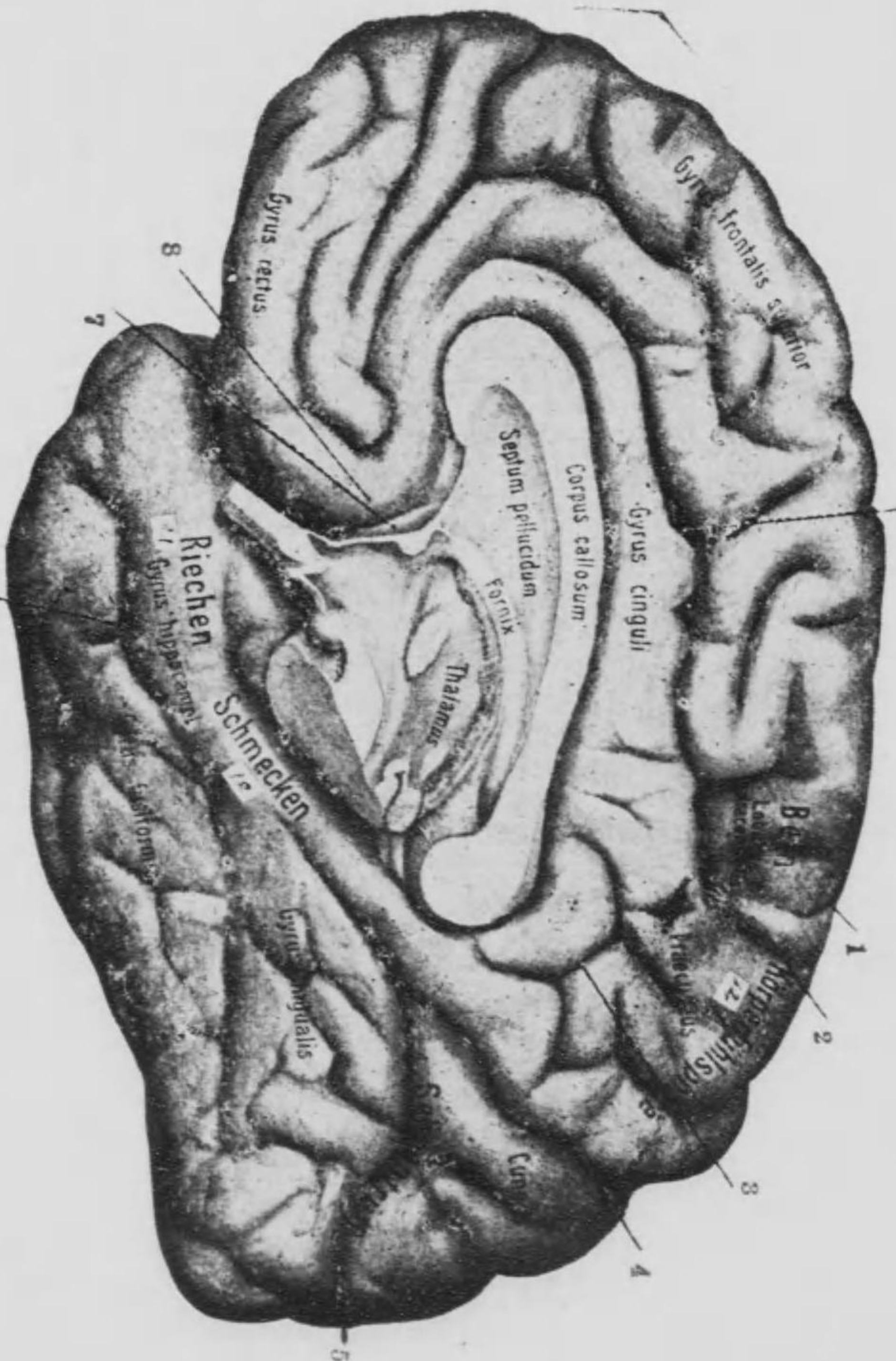
目次

胎兒腦髓の發育圖、其の一、……………四七
 胎兒腦髓の發育圖、其の二(實物大)……………五一

新學
 話窓

たましひ目次終

大脳右半球内側面



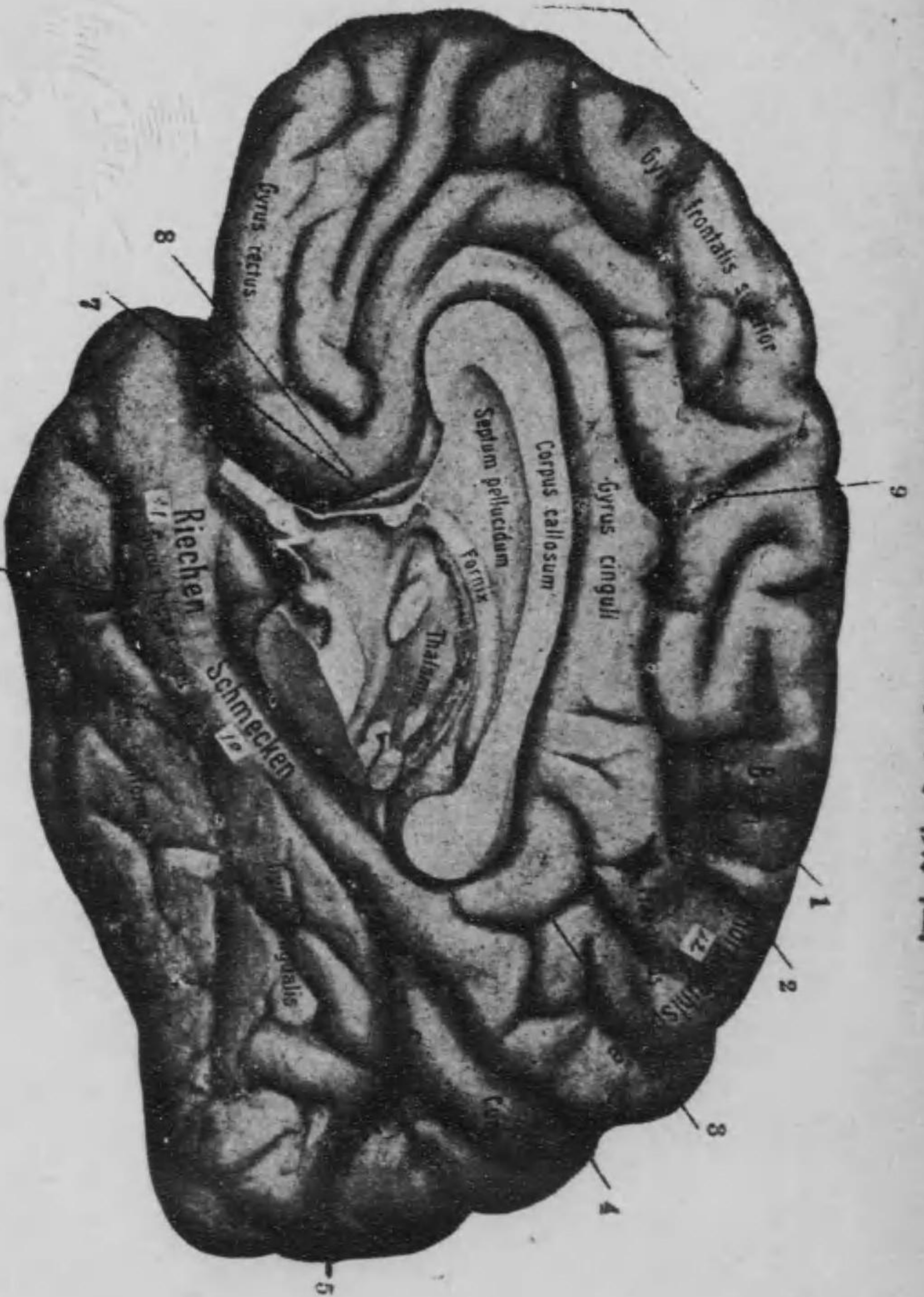
- 1. 正中溝 2. 蠅蝗紋溝(邊緣部) 3. 顱頂上溝 4. 顱頂後頭裂溝 5. 禽距裂溝
- 6. 副額裂溝 7. 肝脈下廻轉 8. 副嗅面 9. 蠅蝗紋溝(前頭下部) 10. 嗅覺中樞
- 11. 嗅覺中樞 12. 身體無覺中樞

目次

胎兒腦髓の發育圖、其の一、……………四七
 胎兒腦髓の發育圖、其の二(實物大)……………五一

新學話 たましひ目次終

大脳右半球内側面



- 1. 正中溝 2. 蠅螳紋溝(邊緣部) 3. 顱頂上溝 4. 顱頂後頭裂溝 5. 禽距裂溝
- 6. 副側裂溝 7. 胼胝下廻轉 8. 副嗅面 9. 蠅螳紋溝(前頭下部) 10. 味覺中樞
- 11. 嗅覺中樞 12. 身體感覺中樞

學窓
新話

たましひ

醫學士 高峰 博著

第一篇

面白き「たましひ」の研究

一、「たましひ」の語義

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

といふ歌にある「大和心」とは、我等日本人の誇りとする「日本魂」の事を指したのであらう。然らば此處に言ふ「たましひ」は「こころ」と面白き「たましひ」の研究

同意義となる。「三つ子のたましひは百迄も續く」てふ諺に於いても其の「魂」は、心理的印象若くは習性の類を意味し、かの薬罐頭の親父が放蕩息子を誡める言葉として、屢々引合ひに出される「魂を入れ替へよ」との文句もつまり「こゝろ」「性根」といふ程の意義と思はれる。

然し乍ら「たましひ」なる言葉は時に單に「たま」とのみ言ふこともあつて、古來甚だ多義である。或は靈怪的、神秘的の事を指し、或は靈魂、魂魄など、熟字する如く、肉體に對して、其の主人公たる精神的活動の本態を意味し、延いては、生命の意ともなる。例へば

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば

忍ぶる事のよわりもぞする

といふ歌の「玉の緒」とは「命」のことであり、

靈ぢはふ神も我をば打棄こそ

しえや命の惜しけくもなし

の、「たまぢはふ」とは、神様が人の靈魂を幸ひ保ち給ふ意。又同じく萬葉集にある、

人魂の眞青なる君がたゞ獨り

逢へりし雨夜は久しく思ほゆ

といふ中の人魂は何かおそろしきもの、幽靈の様なものに就きて言ひ、乃至燐火の類に對して、現今でも同様に此の語を使用する。

更に、「たましづめまつり」(鎮魂祭)は宮内省で新嘗祭の前日(陰曆の十一月中の寅の日、現時は十一月二十二日)に行はせらるゝ一種の祭神の儀で、離遊せる魂魄を招きて、身體の中府に之を鎮めしむる事である

面白き「たましひ」の研究

といふ。佛家に於いては死者の靈魂を孟蘭盆會に招き供養して之を生靈祭または「たままつり」といふ。

嘗に我が民族には古來生靈、亡魂の思想ありしのみならず、隱身的の神ありとなし、其の中にも「にぎみたま(和魂)」「あらみたま(荒魂)」の兩魂を設けてゐる。前者は名の如く進擊的、勇猛の神魂であり、後者は保守的柔和の靈神である。日本書紀卷第九、神功征韓の條に

「神、誨へごと有りて曰く、和魂は玉身に服ひて壽命を守らむ。荒魂は先鋒となりて師船を導かむ」

「既にして則、荒魂を擣きて軍の先鋒と爲し、和魂を請きて王船の鎮めと爲し給ふ」

等とあるのがそれである。又嘗に目に見えぬ靈物を信せしのみならず、

「たましひ」は非情の器物乃至、抽象的の事物にまで之を假託せしめてゐる。たとへば、我が國語を稱ふる意より「ことたまのさきはふくに」(言靈の幸ふ國)などといふ。

尙又「こだま(木靈)」といふものがある。古書にも「こだまなど、けしからぬ物ども所を得て、やう／＼形をあらはし」「天狗、こだまなどやうのもの、の欺き率て奉りけるにや」等とありて、天狗や狐の類と並稱せられる所の怪物である。

以上、余は主として日本古代の思想をのり述べたが、同様の事は世界の各時代の各民族に於いて觀得べく、キリストの教へでは、明かに肉と靈とを區別して、

「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ。唯なんぢら魂と身

たましひ

とを地獄に滅し得る者を懼れよ」(馬太傳第十章)

といひ、又

「神の遣し、者は、神の言を語る。蓋、神これに靈を賜ひて、限量無ければなり」(約翰傳第三章)

とて、靈は神の賦與し給ふ所、しかもまた神其の者の靈なることは、同じくヨハネ傳第三章第六節に「肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり」といふ文で表はされてゐる。

若し夫れ、印度古代の靈魂觀は奇々怪々實に奇想天外的にして、此處に叙べ出すと際限もないから、項目を新たににして、後文に物語らう。兎に角、彼等は萬有の事象に對して、神靈有りとなし、又夫れ、奇抜な形體の神様を案出して、之れに結びつけてゐる。

右の如くに觀來れば「たましひ」又は「たま」みたまなる語は其の意義甚多岐にして、一般に精神、靈魂の義であり、轉じて氣質、習慣乃至生命の意となり、又亡魂や妖怪をも意味する。即約して之を言へば「心」「靈」「生」「氣」「怪」の五種となる。而て此の五種のもは、寔に皆玄妙不可思議の者にして、古今東西の學者も常人も、ともに均しく之を解かんとし、又知らんとしてゐる問題である。此の裡に萬有の科學も、宇宙の神秘もすべて藏されてゐる。千古の秘密は此の問題の中にある。いでや、諸者と共に、此の秘密を暴露かんか。たましひの本態や何物？ たましひの所在や何處？ 請ふまづ、たましひの宿り家を訪れて見やう。

一、たましひの宿り家

怨恨悲愁の情の切なるをば、「血を吐く思ひ」といひ、戀愛相思の仲を英語でスキート、ハート(甘き心)といふ。古來、どこの國でも、人間の精神、就中其の感情や氣質は心臓乃至血流中にあるものと考へたのである。支那でも、日本でも「心」といふ字を「むね」とも誰み又「心臓」の事にもなる。「萬事我が方寸にあり」といふ「方寸」とは心臓の事で、つまり昔の支那人が心臓を以て、胸の中、一寸四方ばかりの面積に當る場所と考へ、而て「こゝろ」の作用もこゝから出ると信じたからである。そして心臓の事をまた寸心ともいふ。併しほんとの面積は、百乃至百五十平方厘、即、ざつと三寸五分四方乃至四寸四方に當るのである。

「昔、龍叔といふ奇人があつた。或時、當代の名醫、文藝といふ人に對して、「あなたは實に大國手で御座るが、なんと私の年來、難澁致しませる持病を御治療下さるまいか」と云ひ出した。「は、ア、成る程、私の手で治せるものなら、一つ盡力して見ませうが、一體持病とはどの様になるので御座るか。」「イヤ、チト、變挺來な病氣で御座りましてな、……一口に云へば、「さつぱり無頓着病」とでも申しますかな。」「へえー、さつぱり無頓着病とな。」「はい、左様で。つまり國中の人間が賞めて呉れやうが、はた、悪口云はうが、一向、馬の耳に風といふわけ。」「成る程。」「それから、貴賤貧富を見ても其の差別なく、人間も豕牛の如く、國の興廢、家の盛衰、てんから問題とならず、妻も可愛いくなく、友もなつかしくなく、何が何やら、さつぱり無頓着で、；

面白き「たましひ」の研究

……一つ、貴殿の處方箋でも頂戴出来れば、服藥致して療治致したう御座る。」

そこで文摯は此の龍叔をば明るい方に脊向けて立たしめ、暫しはじつと胸の邊りを透視してゐた。やがて、徐ろに口を開いて「とくと御病狀拜診致しました。凡そ人間の心臓といふものは方一寸で聖人にもなれば、七つの竅が皆自在に流通して、心の働きも融通無礙であります。貴公の心臓を診るに、今や六つ迄流通してゐるが、まだも一つ塞がつた所がある。その爲に、自分の病氣が自分で苦になるので御座る。まア、貴公は聖人に近い人ぢやな。とても我々共の手におへないお方で御座るわい」と語つた。

是れは列子の仲尼第四に書いてある寓話で、原文は左の如し。

龍叔謂ニ文摯ニ曰。子之術微矣。吾有疾。子能已乎。文摯曰。唯命所聽。然先言ニ子所病之證。龍叔曰。鄉譽不ニ以爲榮。國毀不ニ以爲辱。得而不喜失而弗憂。視生如死。視富如貧。視人如豕。視吾如人。處ニ吾之家。如ニ逆旅之舍。觀ニ吾之郷。如ニ戎蠻之國。凡此衆疾。爵賞不能勸。刑罰不能威。盛衰利害不能易。哀樂不能移。固不可下事ニ國君。交ニ親友。御ニ妻子。制ニ僕隸。此奚疾哉。奚方能已之乎。文摯乃命ニ龍叔。背ニ明而立。文摯自後向ニ明而望之。既而曰。嘻吾見ニ子之心矣。方寸之地虛矣。幾聖人也。子心六孔流通。一孔不達。今以ニ聖智ニ爲疾者。或由此乎。非ニ吾淺術所ニ能已也。

而て、實に「心」といふ字が、心臓の形から造られたので、篆書の「心」の字は、明かにそれを示してゐる。これで見ると、支那でも太古に既に人體

を解剖したことがあるらしく、しかも醫學的研究の不充分なる爲に、いろ／＼の臆説、迷信が加つたものと見える。漢方の醫書には、屢、氣血といふ語と用ゐる。例へば

「中焦は氣を受け、汁を取りて變化す。赤き者を血と謂ふ。氣に非ず、血に非ず、而て氣を通ずる所以の者を脈といふ。」

とあるが、こゝに所謂「中焦」とは胴體の中層部に當るので、こゝにある胃の中から陰に屬する榮氣といふものが出て、上層なる上焦の後ろへ出て肺の宗氣を受けて赤き血となり、身體を榮養する、即、榮氣は宗氣に隨うて脈の中を行く。之に反して、尙他に衛氣といふものがあり、これは、身體下部の下焦から發する陽氣で、宗氣に隨はず又脈の外を行く。

——以上は漢方醫の唱ふる生理學で、勿論、こんな説は今の進んだ醫學

から見れば幼稚にして杜撰な話である。つまり、昔の人は、こんな風に血脉の中にも一種の「榮氣」といふものが流通することゝ信じた。即、「宗氣」の解に曰く「胸中に積みて喉嚨に出で、以て心脈を貫き、呼吸を行ふ」とある。此の思想は管に支那に於いて存せしのみならず、古代のギリシヤにもあつた、現代醫學者が使用する言語の中に、其の名残を留めてゐる。例へば血脉中の動脈の事をば、原語(ラテン語)では、アルテリア Arteria といふが、此の語原は實に「氣體を流通する」といふ意味である。これ彼等が死屍を解剖して見るに、いつも動脈の中が、空虚であるのに静脈の中には血液が一杯充滿して居る所から、人體の脈の中には、氣體と血液と二様の流體が通行し、其の氣體の方が、人間の心靈や氣質にも關係あるものと思ひ誤つたものであらう。實は人間が最後の息を引き

取るや、心臓は此の刹那にギューツと収縮するのである。すると血液は皆動脈の中から静脈の方へ送り込まれる。即、動脈は空虚となつてしまふ。されば死體を解剖すれば、いつでも動脈の中には血液が無いのが當り前で、其の道理が分らなかつたから、上記の如く誤解して、名稱も「空気を有す」てふ意味のアルテリヤとなつて今日にも尙傳はつてゐるのである。

右の如く古人は心の在所は胸中にありと考へたのみならず、又腹の中にもあるかの如く信じた。感情が激奮することを「腹が立つ」といふ。又心の善くない事を「腹黒い」といふ。心中を模索するのを「腹を探ぐる」といふ。漢文には「斷腸」ともいひ、「腸九廻」ともいふ。左に「寸心」の熟語をも使用せる李太白の詩を掲げて其の例としやう。

斗酒薄しと爲す勿れ(斗酒勿レ爲レ薄)

寸心忘れざるを貴ぶ(寸心貴レ不レ忘)

坐ろに惜む故入去り(坐惜故人去)

偏へに遊子をして傷ましむ(偏令ニ遊子傷)

離顔芳草を怨み(離顔怨ニ芳草)

春思垂楊を結ぶ(春思結垂楊)

手を揮うて再三別れ(揮レ手再三別)

岐に臨みて空しく斷腸(臨レ岐空斷腸)

又、柳宗元の「柳洲城樓に登りて漳汀封連四州刺史に寄す」詩に曰く

城上の高樓大荒に接し(城上高樓接大荒)

海天の愁思正に茫茫(海天愁思正茫茫)

「面白きたましひ」の研究

たましひ

驚風亂れ颯々芙蓉の水(驚風亂颯芙蓉水)

密雨斜めに侵す薜荔の墻(密雨斜侵薜荔墻)

嶺樹重ぬて千里の目を遮ぎり(嶺樹重遮千里目)

江流曲つて九廻の腸に似たり(江流曲似九廻腸) (九廻腸の句中に
疑悶の情を寓す)

共に來る百粵文身の地(共來百粵文身地)

猶自ら音書一郷に滯る(猶自音書滯一郷)

又、臍の下、一寸の處を丹田といふて、禪家はこゝに心を落ち着けて、

三昧に入るさうである。黃庭經には曰く

丹田之中精氣微、玉池清水上生肥

と。更に面白い熟語として「肝膽相照らす」といふ事がある。漢醫は曰く

「肝者罷極之本。魂之所居也」

「肝者水之精也。人怒則無不色青目張者其效也」

「膽者清淨之府。中正之官。決斷出焉」

「今、人悲則淚出者。水得火而煎陰必從陽也。老人膽汁慳哭則無淚。

笑則有淚火盛水虧也。故膽熱亦流淚。膽氣虛亦溢爲淚。凡膽熱則多

眠虛則不眠。」

つまり、肝も膽も、古代の支那醫學は一々精神作用と關係をつけて、肝

を以て魂の居る所とし、膽は決斷の出る所とし、又「肝膽の二者は勇

有るを司る」とも云つて居る。されば誠實を表はすことを「披腹心輪肝

膽」(史記)とも云ひ、李白の詩には「豁然心肝を露はす」の句あり、

魏書には「感知己而披肝膽」といひ、又單に「肝を披く」とも熟字す

る。かくして、一方には心中のことを胸裡ともいふと同時に、「腹心」と

面白き「たましひ」の研究

も云ひて、詩經の周南兔置篇にも「赴々武夫、公侯腹心」とあり、文章や演説の草案を心の中で考へておくのを腹案とも腹稿といふ。随つて、蘇軾の詩には「袖手獨不言。默稿已在腹」と詠じてゐる。

讀者は英語でフレンズイ Phrenisy といへば狂氣、亂心の意、又フレネティック Phrenetic は「狂亂」せるの意にして Phrenic と同義なることを、御承知であらう。そして醫學上ではドイツ語でもフレニテイス Phrenitis (英語讀みではフ) といふと腦炎、即、腦髓に於ける炎症と云ふ事になる。以上數語は皆、腦髓又は精神に關して、同一語原、ギリシヤ語のフレネスから來てゐるのである。然るに此のフレネスは元來、胸と腹との境界なる横膈膜の事を云ふ。即、古代のギリシヤに於いても、矢張り支那の思想と類似して精神が横膈に在りと考へたことが分る。此れと、上文の「肝

は罷極の本、魂の居る所也といふのと、比較すると面白い。何故なれば肝臟は丁度横膈膜の下にあつて兩者相ひ近接してゐるからである。而て東西各國の古代文明人が皆胸腹の間に「たましひ」の座を物色して、誤謬の説を成してゐた中に、たゞ特り、古書ではあるが春秋元命苞には「頭者神所居、上圓象天」と書いてある。これのみ卓見にも頭部を以て神魂の宿る所と道破してゐる

是の如くに觀れば「こゝろ」又は「たましひ」の宿は古來或は心臟とし胸部とし、或は腹部とし乃至尿管や肝臟や膽囊と精神作用とに特別の關係あるものとなした事が分る。

けれども所詮、人間靈智の發現する處は、何人も之を知れる如く、腦

たましひ

髓である。併乍ら、果して脳髓の中に靈魂なるものが宿つて、然る後に
玄妙なる精神活動が行はれるのか、はた靈魂てふ如き別種の物有るに非
ずして、脳髓細胞自己の機處が、やがてこれ精神の本態と等しきものな
のであらうかといふ事は、更に別問題となる。故に其の解決は只今は後
廻しとして、次章には脳髓の發育史を略述しやう。

心のうた、其の一、

西行法師

○花にそむ心のいかで残りけむ、

すて果てしきと思ふ我が身に

本居宣長

○なき名ぞと人には云ひてやみぬべし、

心の問はゞ如何答へん

第二篇 胎兒の腦髓(上篇)

一、胎兒の研究はまだ、不十分

世の中の人の心は花ぞめの

うつろひやすき色にぞありける(讀人しらす 古今卷十五)

うつろひ易きは人の心であるが、さてもかゝる心の作用をなす所の「た
ましひ」といふものがありとせば、果して何處から來て何處へ行くもの
であらうか。

玉の緒の長きためにひく人も

消ゆれば露にことならぬかな(樞大納言長家 新古今卷第八)

胎兒の腦髓(上篇)

たましひ

また、

空蟬のからは木毎に留むれど

魂のゆくへを見ぬぞ悲しき(古今卷第十)

目に見えぬ魂の行方を跡追ふよりも、はた、露と消えぬるはかなさに
哀傷を感じるよりも、まづはつきりと形を結び来る所の魂の越し方をし
らべて見やうでないか？ 而して後に、果して此の世は悲観すべきか樂
観すべきか、乃至大観すべきかを、徹底的に観察して見やう。物悲しげ
な歌なぞ詠んで、しめり返へつてゐるよりも、先づ何故に然うなるかを
學ばねばならぬ。それからのちの思想には根抵がある。而てこゝに自信
も生ずる。随つて勇氣も出てくる。いざ根本的に人間精神の發現し来る
経路をば母の胎内に居る時代の所から研究して見やう。甚、奇妙な事が

あるのである。

従來の心理學でも兒童學でも、皆赤ん坊が生れ落ちてから後のことを
捕へてかれこれ議論してゐたが、そんな事では駄目である。不徹底であ
る。もつと遡つてまづこの「心の座」「魂の宿」の組み立てを最初から知ら
ねばほんとの學問でない。

しかも實は今迄此の根本的の十分なる研究が世界中に出来て居らなか
つた。やつと今から十五年程前(一九〇)にドイツのヒス二(二)といふ人が
人間の胎兒の腦に就いて可成り精しく研べたが、これは主として妊娠後
第一ヶ月迄で、以後の事は第四ヶ月の終までであるが、決して完全な報告
ではない。又ブロードマン (Brodmann) といふ學者は今から十年前
(一九一〇)年、胎兒の第六ヶ月や第八ヶ月の腦を調べたが、これとて、あちらこ

ちら、とびくの断片で整つたものでない。其の他にも、レッチウス (Retzius) や ホッホシエテッテル (Hohstetel) や、チーヘン (Zielen) 又、ケヨリケル (Kochliker) や、などといふ學者達も、成る程、此の方面に手を着けて見られたが、やつぱり、學説には異議百出し、而てまだ全然未解決、未発見の分野が随分澤山残つてゐる。

然らば何故にそんなに此の方面の智識が開けぬのか。第一に材料がなからである。一寸考へても分るが妊娠後一週間や二週間乃至四ヶ月や五ヶ月位の胎児は中々に手に入るものでない。鼠や豚の如き動物ならば、ドシ／＼試験的に殺して研究できるが、人間に對しては、學術の試験だからとて、どうすることもできぬ。昔、支那の暴君は懷妊の婦人を中庭に引き出して、其の腹を剖いて胎児を剔出したといふ話があるが、

現代にそんな真似でもしやうものなら、それこそ大變である。だから、たゞかゝる好材料が正規の方法で學者の手に入るのを苦心して索め、又渴望して居るに過ぎぬ。随つて、第二の理由としては、之を研究しやうとしても材料が十分でないから、其の研究者の數も澤山ない。即、從來此れに關する業績の極めて貧弱なる所以である。尤も、アメリカ人のベイトン (Paton) は豚の腦を研究し、其の他、ドイツのブロードマンやチーヘンや又はシエーバア等も他の動物の腦に於いて追々多少精しく觀てあるものゝ、勿論之を以て直ちに人腦に當てはめる事はできぬ。斯うしたわけで、余が今、左に述べやうとする話は、醫學の中でも最も新らしくして、又面白い部分なのである。どうか、讀者の中でも、もしも何かの傳手で胎児が得られたならば、東京帝國大學精神科に於ける高峰にま

で、または序文に書いてある通りの名宛でなりと御報告又は御寄贈下さ
れ度、然らば正規の手續を経て後、之を受領して大學の貴重なる研究材
料に加へ得ることと思ふ。學問の發達も是の如くに公共の援助がありて
始めて駁々乎たるを得るのである。そして社會一般の智識が向上せられ
るのである。これについても想ひ起す事は、昔、支那では餘稅醫學殊に
解剖の智識が進んでゐたらしく、かの上文に書いた所の「心」の字の話の
外に、胎兒に關しても左の如き文がある。

二、古代の驚くべき醫學的智識

漢法の醫書、「耆婆五藏論」といふ本には、妊娠各月に於ける胎兒の事
を記して、

「一月如珠露。二月如桃花。三月男女分。四月形象具。五月筋骨成。
六月毛髮生。七月遊其魂、兒能動左手。八月遊其魂、兒能動右手。
九月三轉身。十月受氣足。」
といひ、又、孫真人曰く、

「一月胚、二月胎、三月有血脈、四月形體成、五月能動、六月諸骨具、
七月毛髮生、八月藏腑具、九月穀入胃、十月百神備、則生矣。」

勿論、今の如く精細なる醫學的觀察では無いけれども、兎にかく、昔の
開けぬ時代に、これだけの區別を記述した所は感心である。そこで上文
の漢法書の記事が、どこまで正しくて、又如何なる點が誤つてゐるかに
就いて左に論評してみやう。

まづ甲の文なる「一月には珠露の如く」とあるのは、凡らく實驗した

胎兒の腦髓(上篇)

智識であらう。實に妊娠の第一ヶ月以内は、まだ胎兒といふ名を與へる事が出来ない之を「胎芽」といふ。そしてやつと第四週間の終りにもなれば、全卵の大きさが鳩の卵程となり、その中の子供になる部分は、僅に七乃至七・五密迷(即、日本の曲尺の二分三厘乃至二分四厘七毛といふ身長であるから、極めて微小なものである。こんな際にはまだ動物の胎芽との區別もつかぬ。

然るに第二ヶ月の中頃になれば、漸く人間の形態が判然して来る。そこで胎芽といふ名を改めて、以後「胎兒」と呼ぶ。全卵の大きさは小鶏の卵程で、上記の漢文に、「二月は桃花の如し」とあるのも、恐らく此の邊の意味であらう。此の卵中、身體になる部の全長が二十二乃至二十五密迷(即我が七分二厘六毛乃至八分二厘五毛)に當る。

尙、こゝに附言すべきは、孫真人の語なる「一月は胚、二月は胎」といふのも、蓋し實見上の根據があつての事であらう。第一ヶ月前後はまだ胎兒 Koelinus といへぬから胎芽 Embryo といふとは磐瀨博士の産科學に據つたのであるが、若し右の如く、胚と胎との字を使ひ分けるならば胎芽といふ代りに「胚兒」といひて「胎兒」なる語に對せしめるのも不可無からう。——殊に上文引用せし通りの典據もあるのであるから——

所で、次に乙文中「三月には血脈あり」てふ文は妥當でない。事實は血管はもつと早く第三週頃には既に現れ、而て第一ヶ月以内を十期に分けるとヒスの所謂第六乃至第七期頃には腦及び脊髓の部が他の部分との境界を有するに至り、心臓も管狀をなして、漸く血行の事に干かるらしいのである。

それから、甲の漢文には「三月には男女分る」とある。これは正しい。胎兒の外形を見て、其の性を識別し得るのは正に此の頃で、以後甲乙孰れにも記す如く四月には形象が具はる。又、漢法書には或は「六月に毛髮生じ」とも「七月に毛髮生ず」とも書いてあるが、事實は既に四ヶ月頃から細かい毳毛が発生し始めて、第五ヶ月には毛髮が生ずるのである。

胎兒の運動に就きても甲文には「七月には其の魂を遊ばせて、兒は能く左手を動かす、八月には其の魄を遊ばせて、兒は能く右手を動かす」とあるのは、信用できぬ。それよりも乙文に所謂「五月には能く動く」と書いてある方が事實に近い。併し實は既に第四ヶ月頃から、そろそろ胎兒の運動が始まるので、之を體に於いて十分に感知し得るのが第五

ヶ月目位なのである。

こんな風に観れば、古代の東洋醫書も大體に於いて現代の所説と一致してゐる。これ其の實地解剖上の知見であらうと思はれる。

三、古代の醫術は印度が最も

發達してゐた

今でこそ、西洋醫術は、最も進歩したる學問とはなつてゐるが、今より二千五百年の太古には、印度醫學は實に立派な發達をなしてゐたのである。

抑、かのピタゴラスやプラト一等の希臘哲學者の思想乃至智識が大に印度より之を收受せしが如くに、かの醫聖ヒポクラテスも同じく其の醫

胎兒の腦髓(ト縮)

術及び醫藥を印度より仰ぎ收むるを得たものらしい。何故なれば、彼が教授せし理學は多くは印度系統に屬し、又彼自身はアフリカのリビヤ乃至、アジアのスシシア地方に遊歴せし事あるは、メルキエリアル氏の言ふ所であつて、當時の印度文明は西漸して希臘文明を助長せしめたものと言ふべきである、現にアレキサンドル大帝も其の遠征に方りて、上記の地方人民が大に醫術に精しき事を親しく知り得たといふ。

かくの如く印度人は西歴紀元前三百年乃至六百年の間に既に醫療の法の備りしものがあり、殊に「エール、ベタ」なる醫經は其の最古の種類に屬する。而て彼等印度人が最も得意としたのは解剖學らしくして、就中其の骨數を數ふる事は、其の精細なる正に現時の醫書に説くが如く、又内臓や大血管に關する觀察も實に綿密なものであつた。

加ふるに、現時でも開腹術や、胎兒穿顱術等は大手術の部に屬するが實に往古の印度人は難産時に於いて此の開腹術だの、又は胎兒を切斷して分娩せしむる方法乃至、膀胱結石の除去法の如き、皆彼等印度人の試みし所である。

右の事は夙に英醫、トーマス、ソイズ氏が、ボンベイに於いて之を考證してロンドンの一醫學雜誌に寄稿して居る。而て余は謂ふに印度醫學が西漸するに共に、また東漸もして、大に支那の醫學にも影響する所があつたに違ひない。かの上文引照せし甲乙二種の記載の如きは、素より杜撰又附會の文句もあるが、大體に於いて、其の事實に據依せし事を想はしむるものである。

若し夫れ、七月に遊ぶを魂とし、八月に遊ぶを魄とする如きは全く根

胎兒の腦髓(上篇)

據もない臆説で、例の支那人一流に舞文弄句の文癖に過ぎない。尙、之に關しては、左傳の昭公七年の條に

子産曰。人生始化。曰魄。既生魄。陽曰魂。

とあつて、魂を陽とし、魄を陰とし、又神氣を魂とし、形骸を魄とすといふ。一口に魂魄といへば、「たましひ」の事であるが、こゝにも陰陽を配して面倒な理窟を捏ねてゐる。こんな事は大して價値もない。

但、例の魂魄の座は、果して胎兒第何ヶ月の腦に於いて其の顯著なる相を呈して來るのであらうか。これから愈顯微鏡的研究に屬し、現今ですらも未開拓の區域なる事、上文所説の如くであるが、今之を説く前に、尙、肉眼で見た所の胎兒の腦髓に就いて大要を語らう。

四、胎兒の腦髓(肉眼的所見)

1、體長、體重、腦重等の關係

一口に胎兒の腦といつてもその發生の最初から、第十月目に至る間には、其の形態上に其の組織上に隨つてまた其の重量、容積等の上になつて、顯著なる變化を示すものである。最初の第一ヶ月は、胎兒全體の身長が、やつと二分三四厘しかないのであるから、肉眼で見たり、重さを計つたりすることは困難である。二月の末にはズツと大きくなつて七八分の長さになる。でも、まだ一寸足らずである。今左に各胎生期に於ける胎兒の全長と、體重とを記して見やう。

各胎生期	體長(センチ)	體重量(瓦)
第一ヶ月の末	〇・七—〇・七五	
第二ヶ月の末	二・二—二・五	
第三ヶ月	七—九	二〇
第四ヶ月	一〇—一七	一二〇
第五ヶ月	一八—二七	三〇〇
第六ヶ月	二八—三四	六五〇
第七ヶ月	三五—三八	一〇〇〇
第八ヶ月	四〇—四三	一五〇〇
第九ヶ月	四六—四八	二五〇〇
第十ヶ月	四八—五〇	三〇〇〇

次に各胎生期の脳の重量に就きては、醫學士林道倫氏の左の如き報告がある。

(兒童研究、大正五年十一月二十四日)

各胎生期	胎兒腦の重量(單位瓦)
三ヶ月 (?)	二〇
四ヶ月 (?)	五六
五ヶ月 (?)	六八
六ヶ月 (始)	一九四、二〇〇
七ヶ月 (始)	一九七
八ヶ月 (始)	二六五
九ヶ月 (始)	四一五
十ヶ月 (終)	四四八
	四一五、四七八 (双生兒)
	四三〇、四八八、四七〇

胎兒の腦髓(上篇)

けれども、右の如き数字は甚、變差のあるもので、個人的にも異り、且、妊娠第何月か、正確なる事の分らぬ場合が多い。上記の三ヶ月の脳量二十瓦といふのも、甚不詳なので、其の前の統計には、第三ヶ月胎兒全重量が二十瓦とある如く、相互随分懸隔があると曰はねばならぬ。

又、ミイス(三三九)氏の研究に擔れば初生兒の脳重量が男兒では三三九・二五瓦、女兒に於いては、三二九・九九瓦なる事は、余が前著「脳味噌」第二六四頁にも書いたが、其の他オーベルスタイン(Obertainer)氏の調査では、初生兒の脳重を三百五十瓦となし、又フェイステル(Pfeiffer)氏は生後三ヶ月にして、既に男女の脳重の差が二百五十瓦に迄も達すといふてゐる。

こういう次第で、成長した人の脳重量も、男子では、

一三七五瓦、女子では一二四五瓦を有すと、ラウベル、コープシユ氏は書いて居るが、オーベルスタイン氏は男腦が一三六〇瓦、女腦一二三〇瓦と云つてゐる。孰れ、個々人々によりて多少の相違はあるが大體の處は右の数字で見當が付き得たと思ふ。

さて上掲の表によりても知らるゝ通り、胎兒の脳髓の重量増加は、第八ヶ月迄が甚、急激であつて、以後出生時までには、さして著しき増量が無い、此の事は後に述ぶる所の腦外形の發育や、腦組織の分化ともちやんと一致してゐる。俗に「七月兒が育つが八月兒は育たぬ」といふけれども實は大した根據の無い諺で、其の哺育法さへ良しくば、既に八月目位からならば生育し得る可能性が十分にあるのである。

次に小腦に就いては如何？ 胎兒の小腦は、其れと大腦との大きさの比

胎兒の腦髓(上篇)

が、成人に於ける割合に比べると、甚小さい。これは林學士も既に左の數を擧げて、報告してゐる。同氏は尙、腦幹との割合をも調査して曰く

六ヶ月胎兒	成人(例第三)	成人(例第八)	猫	馬	豚
一五一	一三〇四	一〇〇〇	二六	一三四	八六
四〇六五	一七〇	一七〇	四〇〇	三九	一二五
四〇〇	三二	三〇	四〇三	五二	一六五
三三二	七一一	六〇〇	六〇〇	三三二	七〇〇
三七八	五四七	三四〇	六〇〇	二四	五二
一一二六	一七〇七	一五〇七	一〇九三	一〇七五	一〇七六
一	一	一	一	一	一

(注意——原表には成人の腦につきては十例をあけてあつた。余は、其の代表的なもの二つを摘録したのである。)

右の表によれば、成人に於ける小腦と大腦との比が、一と七。一(平均

數)であるのに、六ヶ月胎兒では、一と三二。二の比となる。即、六ヶ月胎兒の小腦は成人のに比較すると、大約四倍乃至五倍も發達の度が遅いといはねばならぬ。之に反して腦髓中の腦幹に關しては、さして大變動がないので、六ヶ月胎兒腦の腦幹一に對して、其の大腦は三七・八倍、而して、成人に於いても三四乃至五四・七倍である。この説明につきては林氏は左の如く述べてゐる。

2. 腦幹を標準とするの説

「凡そ腦髓を大腦、小腦、幹腦の三に分つて見ますと、大腦は精神能力又は叡智の府であり、小腦は運動の攝調を司り、幹腦は生命の宿るところである。……心臓を鼓舞し、呼吸を整頓し、血管を支配する中樞たる幹腦の造構は、低級なる動物にても高級なるものにも大なる差別を認むることは出来ない。即、幹腦は腦髓内で最古から發達した

胎兒の腦髓(上篇)

部分である。大脳はこれに反して動物の叡智發達の程度に應じ、外形にも重量にも非常なる差異があります。さて此の大脳の發達の具合は何によつて表はしたら一番便利であるかと申しますと、單に腦髓全體の重量又は大脳の重量丈では不十分であります。何となれば腦髓の重量のみから云へば、象とか鯨とかは人間よりは遙かに叡智が高等であると云ふことになります。體重との比を採る方法もありまして、これを比較的腦重量 (Relative Hirngewicht) と名づけられてありますが、これでは鳴禽類又は身體の小さな猿猴類などよりは良い數を與へます。身長と腦重量との比を作ると云ふことも、人間なら兎も角、動物には身體が長くても高等で無いものもありますからあまり確かな目標とも看做し難い。

然らば如何したらよいかと申しますと、私が見る所を以てすれば、腦髓發達の度を數を以て示すには、腦髓の各部分を別々に秤量して、その比を求めるのが宜しい。即、生命生活機轉の宿するところで、宗族發生的に餘り造構の差異の無い腦幹を一とし、これと精神機轉の府たる大脳との比を定め、これを以て動物の大脳の發達を表はす數とします。私はこれを精神能力示數又は叡智示數 (Index der psychischen Funktion) と命名させよう。小脳の發達を表はす數も同様で、幹腦を一とし、小脳重量のそれに對する比を用ゐます。小脳は運動に干繋ある機關であります。運動の量の多寡を測ることは容易でない。……思ふに運動は量でなく、其の微妙なる點、即、共應作用 Koordination の度で、其の品質を分つべきものでありませう。従つて私は小

脳と幹腦との比を共應示數 (Index der Koordination der Bewegung) と稱へたい。

此の説は、兎に角面白い考へで、殊に腦幹を單位となして、他の部、即ち大脳及び小脳を比較しやうとする點は大に一考に價する點である。

是の如くに、各胎生期の腦の重量を計り、又各部分の比較をとりて、其の發達經路を推知し得るのであるが、我等は更に進んで、其の解剖上の所見をも確めねばならぬ。

畸形兒の中には、隨分、人の目を驚かしむるに足る奇態怪形のものが生れるが、其中でも牛腦兒や無腦兒や無頭兒は氣味のわるい姿である。頭部が全然缺如して、胴體と手足のあるもの——時には、胸がなくて、胴と脚ばかりのもあすが——之を無頭兒といふ。何のことはない、立派なお化けである。

それから、頭部殊に顔面の部は多少、目鼻が存在してゐるが、腦髓の部分も全然又は一部缺損してゐる畸形兒もある。之を無腦兒又は半腦兒といふので、これ、胎兒の初期に其の頭部に腦水腫が生じ、且破裂して、こんな形になるのである。

第三篇 胎兒の腦髓 (下篇)

——余は本篇に於いては、諸所に學術上の言語を使用して、多少、専門的に亘ることを述べやうと思ふ。成るべく平易に書き、又圖畫を入れて理解に便ならしめるつもりであるから、もし讀者中、其の素養ある人又は是の方面に關して新らしき智識を得たい人は、續いて本篇を續讀あれ。亦一二頁よんで見て、どうも分りにくい様だと思はれたら、さつさと此の一篇だけを省略して直ちに第四篇を讀まれても決して興味が斷絶せられることはない。

余は本書に略説せしことは、前著の腦味噌に詳叙し又、讀者にとつて、どうしても難解不明の箇所は、いづれ追つて別著を出すから、其の際に比較参照し得べく仕組んである。余はたとひ全く別種の様な名目で著述した時でも又如何に通俗にくだけて書いた時でも、必ず後言は前言を補ひ、前著は後著の準備となるやうに、どこかに聯絡をとつてあるから、幸ひに一個所乃至二三個所が不可解なりとて、之を以て全編を捨てられざらんことを望む。兎に角、此の一篇だけは、各自好む所に隨つて飛ばして讀まれてもよろしい。

一 腦溝、腦廻轉等の關係

妊娠第二週の胎兒全長が僅か一分内外の長さで、しかも其の腦髓部は甚大きく、其の約三分の一、即、三厘位の長さである。其の形の變化は挿圖を見られよ。(第一圖は四七頁、第二圖は五一頁にあり)

第一圖の如く、第二週以後第七週前後までは、其の腦の形態は唯簡單なる管筒状のものに、其の天邊や側方に、ブクリ／＼とふくらみを出來したやうなものである。これが追々發育し、随つて各部の屈曲と複雑となると共に、漸く圓錐状の人腦型を呈し來る。其の形は第二圖の如くで、第二ヶ月、第三ヶ月及び第五ヶ月の胎兒の腦を、表はしてある。皆、實物大である。

第 四 圖



A.....胎兒腦、妊娠第二週日目
B.....同上、第四週日目
C.....同上、第六週日目
D.....同上、第七週日目

胎兒の腦髓(下編)

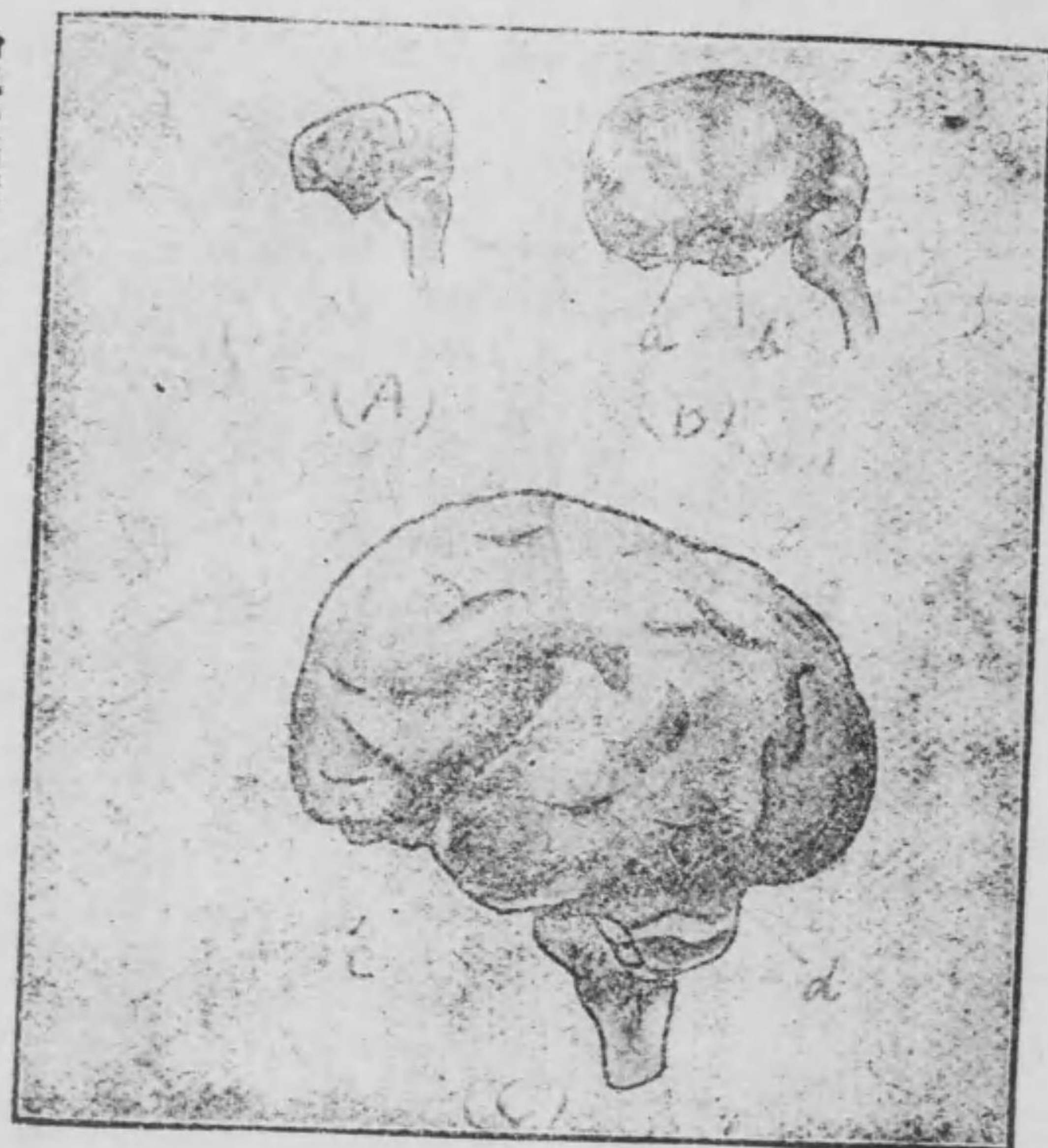
讀者よ第五頁なる圖に於て如何なる場所に注目すべきか？ 胎生第二ヶ月の末では、まだ十分に大脳半球の穹窿面が後方へ發育して居るのから、小脳や、幹腦は、大脳の後ろに食み出してゐる。又第三ヶ月目の脳でも、鳥葉といふ部分を中心として其の境界線たる「輪狀溝」から二三の條溝が放射してゐる、此等の條溝は將來永く残るものではなくて、やがて消失するのであるから、「一時性腦溝」と稱してゐる。小脳に於いては、其の蟲葉といふ部分の眞ん中に、一條の腦溝があるだけで、兩半球も平滑である。

然るに第五ヶ月ともなれば、成人の腦に於いて見る所の腦溝が追々と發現してくる。即、外側面に於いてはローランド氏溝や、顛頂―後頭裂溝や、内側面では鳥距裂溝等が見え初める。これらを第一性腦溝と名ける。讀者はかういふ専門的の名稱については本書及び腦味噌中の挿圖を参照せられよ。

胎生六ヶ月目には右の第一性腦溝の他に上顛顛溝、顛頂間溝、上前頭溝、下前頭溝等も發生する。之等を第二性腦溝といふ。又鳥葉部も餘程掩蔽せられて、これがやがてシルヴィエス氏裂溝となるべき途中なのである。又後端に於いては後に上邊縁廻轉と名づける場所に多少、其の發生の萌しを見るべく、ブローカ氏廻轉も下前頭溝の下部に形成せられつゝある。

讀者は「腦味噌」第五版の巻頭に挿入したる腦髓外側面の圖及び本書巻頭の同内側面の圖を参照せられたい。内側面圖に於ける視覺中樞の部分は、此の胎生六ヶ月頃になれば、はや境界がつき始め、又聽覺中樞は、

第二圖 (實物大)



胎兒の腦髓(下篇)

- | | |
|------------------|------------------|
| A.....胎兒腦、第二ヶ月の末 | a.....鳥葉 |
| B.....同上、第三ヶ月 | d.....輪狀溝 |
| C.....同上、第五ヶ月 | c.....ジルヴェイユース氏溝 |
| | b.....小腦 |

たましひ
 上顛顛溝が現て來爲に判然と區別せられ、又この上顛顛溝と顛頂間溝との間には偶角廻轉が生じ始めた。かくして成人の腦髓に於ける各種の中樞、即、眼や、耳や、手足の運動や、その他、言語の中樞部が此の時分からして漸々と各自其の領分を鮮明せしめてくる、つまり腦髓といふもの、目鼻が附いて來た事になる。是の如き發達をするのは、上文の如く第四ヶ月の末よりして第五ヶ月乃至六ヶ月にかけての事である、又こゝに附言すべきは此の第四ヶ月末から第五ヶ月半にかけて、腦の表面に疣狀の苔生物がある。これを疣贅情態と稱して居るが、これは、既に一八九五年にグスターヴ、レッチウスといふ人が發見して記載してゐる。後文に説く所の外顆粒層の異常なる増長と關係があらうとは考へられるけれども、併しまだ如何なる性質のものとの定説はない。余は第五ヶ月

の胎兒腦に發見したる一時性の最外顆粒層とも大關係ある事と思ふ。

何故なれば、以上三つの者、即、疣贅情態と最外顆粒層と而して外顆粒

層の異常増殖とは、時を同じうして發し又時を同じうして消滅するから

である。尙委細の事は本書に於いては省略しておくより外はない。

さて、胎生期の進むにつれて、其の外形も内容も益々成人の腦の形式に

近似し、はや胎生八ヶ月ともなれば、其の腦溝や腦廻轉は殆ど成人型

と相違なき迄に發達する。今迄は島葉といふ部も裸出したまゝであつた

がこゝでは、全く掩蔽せられて、其の境界部たるジルヅイユース氏裂溝

も出來上がつて來た。たゞ腦の底面の發達はまだ不十分で、前方の眼窩

葉といふ部から側方の顛顚葉へかけての廻轉乃至腦溝の起伏が無くして

平坦である。

更に進んで胎生九ヶ月以後ともなれば、形こそ小さけれ殆ど成人型の外形を呈し、餘程發育の度が顯著である。

あまり六づかし言葉は、これでおしまひとしておいて、今迄の話を約言すれば、胎生期第二ヶ月の末頃には大脳穹隆部が、圓く増大して漸く人腦の型式を示し、第五ヶ月前後には、後來の腦溝や廻轉が追々發現増長し始め、而て第八ヶ月に於いては殆ど完全なる大脳型を形成し終る。此の間に、形態の變化は實に胎生の初期より第二ヶ月末までが著しく、以後また第八ヶ月迄は重量上に急激の増加あり、就中、第五ヶ月目前後が時期の然かるが如くに胎兒腦の發育に關しても正に其の中間期、移行期に位することを知るのである。余は自ら其の組織的の微細なる造構をも研究して、愈々第五ヶ月目の胎兒の腦は實質、外形共に移行型なる

ことを確めた。左に之を述べやう。

二 顕微鏡で研究すれば如何に？

借是の如くに外形が其の發育の度を増すにつれて、其の内容も實に奇妙不思議なる變化を呈してくるのである。これは勿論、顕微鏡で見ても始めて、認識し得るので、殊に其の微細なる所は千倍乃至千五百倍にも廓大して、尙辛うじて判断し得るに過ぎぬ事がある。

細かい事の話では、佛教で色法と稱ふる所の此現象界の物質をば、最微の極點にまで分割したるものを「極微」といふのである。いはゞ現今科學の「原子」といふやうなものであらう。そして、其の大きさはと問はゞ、實に、かの空中に浮游飛散してゐる所の微小なる塵埃——これを

隙遊塵と名けるが、その八十二萬三千五百四十三分の一に當るといふ。この驚くべき細微なものが積集して宇宙間の一切の色法が成るのであるとは俱舍論の説く所である。さて此の「極微」を七倍したものを單に「微」とも「微塵」とも呼ぶ。まあ、科學の説明に當てはめると「分子」のやうな類であらうか？ そしてこんな小さなものは、天眼でならば見得るが、肉眼では見えないといふのである。

右の如き途微もない、極微や微塵とまでは、ゆかないにしても我等の顕微鏡下に取り扱ふ細胞の小ささは恐らく諸君の想像以上であらう。以下によく「細胞」といふ言葉を用ゐるが、すべて生物體は其の數の多少こそあれ、兎に角、細胞と云ふものの集積組織に依つて成り立つてゐる。猶、天に聳ゆる峩々たる大厦高樓の西洋館も、其の根本は小さな煉瓦が

無數に積疊せられて建つてゐるのと同じである。所で、只今の問題にしてゐる脳髓神経の細胞が果して、どれ程、玄微極小のものであるか？ 諸君、一ミリメートルの長さと言へば、我が三厘三毛である。既に寔に小さなものである。しかも後に述べる神経母細胞といふもの、中心となつてゐる核の直径が實に、この一ミリメートルの千分の五乃至六又は七といふのであるから、驚くべき小さなもの、話なる事を知られるであらう。靈妙不可思議なるたましひの作用が、かくも微小なる細胞に依つて發現し來るとは、考へれば考へる程、不可思議でないか！ もう少し此の妙作用の根本たるべき胎兒の脳組織を語つて見やう。

凡そ人の頭腦の中には脳髓表面の灰白色なる皮質部に無數の神経細胞ありて、相互に突起を出して聯結し、亦各、一條の長き神経纖維を發し

て内部へ送り、これが湊合集束せられて、白色の髓質となつてゐる。猶、この關係は、之を電信電話に喩ふれば神経細胞は恰も、電信電話の機械の如く、神経纖維は恰も電線たるべき針金に相當し、而てこの電線が一先づ交換局にて集束せられ。それから四方八方へ分派せらるるのは、恰、髓質に於けるものとよく似てゐる。又、實際にも、交換局に於けるが如くに、一神経細胞と他神経細胞、乃至一中樞と他中樞とを相互に聯結する所の神経纖維も存在するのである。

右の話の大略はもう少し詳しく、脳味噌の第二五六―七頁に書いておいたか、孰れにしる、これは成育した脳味噌の事である。とても最初から、こんな微妙な装置が突然に發現するのでない。漸徐逐次に、繊細なる造構を組織し來るのである。

まづ妊娠第二ヶ月の前後には、脳の組織中には後來神経となるべきものはまだ何物もない。云はゞ家屋の建築中といった風に、地盤に相當すべき内境界線と屋根に相當する外境界線とがあり、この中に、壁や柱や渠や椽となるべき、基質母細胞(Spongioblasten)がある。しかし主人公たるべき家族はまだ住居してゐない。やがて、右の基質母細胞といふものが、益増殖して中層部に集合し、この生きたる家屋は、我々人間の造る家とは異つて、内部から外方へかけて、どしどし肥大増長してくる。かくして胎生の第四週間頃には、地盤の部分、即ち内境界線の所に沿うて、あちら、こちらに萌芽細胞(Keimzellen)といふものが現れる。これが、追々と分裂増殖して神経母細胞(Neuroblasten)といふものを産出する。此の母細胞が成育すると愈々後來の神経細胞となるのである。

此の際面白いのは件の神経母細胞の發育経路にして、決して尋常一様に、其の場で生長して、完成するのではない。まづ内境界線に近接する部分に密に集合する。即ち、母床(Matrix)を形成する。それからゾロゾロと動き出して此の細胞部隊に疎密の差が生ずるからして、追々と段々の層が出来る。即ち、母床より外方が中間層で、其のまた外方が、外境界線に近接する層、即ち、外層といふ。そこで、母細胞は、上記の如くかの母床から追々と行軍を始めて、中間層に於いては、其の密度が疎薄となり、しかも行列を成しつ、隊伍整々と、外層へ着到し来る。こゝに、外層に於いては新たに此の行軍隊の屯營地が出来たわけで、こゝに一層が殖えることになる。之を皮質層又は外顆粒層といふ。其の名は、讀んで字の如く、此處が後來の皮質の主要部となる部分であり、又、其處なる

神経細胞の集合は恰も顆粒状をしてゐるからである。これまでになる時日は大約胎生の第十一週目(三月半目)前後に當る。

即、今や胎兒腦髓の組織は、内外兩境界線の間に、最内方の母床、それから中間層、次に皮質層、而て最外部に、神経細胞の存せざる外層が形成せられたわけである。以上四層は皆、細胞集合の密度の差に因りて生ずるので、妊娠月の進むにつれて、此の層段は更に複雑となる。

余の研究したる所によれば、第四ヶ月目には、中間層が更に分化して線條層が出来、第五ヶ月目には、此の線條層と中間層との間に、内顆粒層が生じ、且、外層の最外部に、別に一層、最外顆粒層が現れる。けれども、此の最外顆粒層は、再び消失して第六ヶ月以後の胎兒の腦には存しない。

尙又、同じく、線條層の中にも、之を區別すれば第一及び第二の層があり、又内顆粒層にも上下の區別が出来る。こんな風に、第四乃至第五の胎生月に於いては随分幾層も生ずるので、其の多き場所では、余は九層まで算へた。

正に此の第五ヶ月目が、腦髓組織生育の丁度半途に當るので、第六ヶ月目位から、順次、各層分化の統一もつきて、成人の腦髓皮質に見る如き六階段の細胞層が整頓し始める。此の點につきては、前著「腦味噌」の第二五六頁を参照せられよ。

さて、第六ヶ月以後に現れる、基本的の六層とは何と何であるか？

腦髓の外表部から内深部へ向つて順々に算ふれば
第一層が疎粒細胞層(最表層)

第二層が外顆粒層

第三層が圓錐形細胞層

第四層が内顆粒層

第五層が大神經細胞層

第六層が多形細胞層

かくして、皮質が完成し、又髓質も發育して、成人の腦髓形となるのである。

そこで、余が初め、面白い事があると、いつたのは、この神經母細胞が母床から外顆粒層迄進行して來る方法に就いてで、これ從來學者間に議論のある點である。

此の方面の大家ヒス氏は、母細胞運動に於いて、其の兩端の突起に消

長があり、又細胞の核體の大きさにも變化ありと言ふので、即、細胞核は中間層を通行中は、多少ほつそりとして突起は前進方向へ長く延びてゐる。然るに之に反して到着點たる外顆粒層に近づくに従ひ、核體の大きさも増大し、又突起は尻尾（即、専門語でいふと神經突起）が長くなつてゐるといふ。

此の説に異つた考を發表したのは、米人ベイトンで既にヒスよりも五年前、即、一八九九年に彼は一説を發表して曰く、神經母細胞は其の旅行中にグルリと百八十度の廻轉をする、即、母床を出發當時に前方へ向いてゐた長い突起が、到着點近くでは己に逆轉してゐるから後ろ向きになつてゐると。ドイツのシェーバ Schäper といふ人も同様の事を唱へた。

余の研究した所では、どうもどちらの説も不十分である様に見える。如何にも、神経母細胞は運動して進むが余の見るところでは、必しもペイトンのいふ如く逆轉するのではない。勿論、細胞は其の情態によりて或る時は横轉し、或る時は斜轉しつゝ前進するが、それは、脳髓の基質の増殖と關係があるので、さればこそ、其の進行中の如何なる部分に於いても實に種々雑多の位置に於ける母細胞を見る。而て余の特言せんとするのは其の細胞の廻轉かはた突起の消長にあらすして、實に、核其の物がアミイバ状に變形しつゝ移動すること、又、個々の細胞は敢て單獨に行進するのではなくて、若干個、連綿と相連鎖をなして母床から、外顆粒層へ到着する、斯の如きとは未だどの學者も言はない點であるし、事、亦、全く専門の事に屬する。けれども、實は余は既に之を今年（大正八年）

の五月二十五日の兒童學會總會で發表し、次で其の翌月十二日にも精神病學會で之を報告することになつて、たとひ其の精細なる論點及び標本の説明は、素より本書の如き、通俗用の小冊子中に詳説する場ではないが、こゝに一言、右の次第を附言しておくのも無用でないと思ふのである。若し、中に専門家の讀者あらば、乞ふ、其の委細の事は別に著す所の拙論に就いて高教を賜はらんことを望む。

本文に叙べし如き、胎生期情態の脳細胞が生後にも永く未發達の儘で残つてゐる事がある。白癡や痴愚などと稱する精神低格者の脳髓に於いて之を見る。例へば結節性腦硬化症による癡呆兒の腦を鏡檢するに、神經細胞の發育不全なる形態、即、圓形又は球圓形にして著色淡く、突起類少く、又中には、紡錘形のものもある。その他、皮質（灰白質）と白質との境界も判然せず、細胞の各層も混亂して甚小整頓なる情態を見せてゐる。勿論、かゝる白癡兒の腦外形は一般に小さく、又畸形的の事多く、腦廻轉も少なく皮質の厚さも狭い。

たましひ

心のうた、其の二

承陽大師

○濁りなき心の水にすむ月は

波もくだけて光とぞなる

親鸞聖人

○月影は千々に碎けて映れども

ながむる人の心にぞすむ

隨天

○空にすむ月のみ姿圓かなれど

影みだすかも波の心は

第四篇 子供の脳髓

一、子供のたましひは其の運動を

見て判ずべし

たましひのお宿が既に胎内、第八ヶ月位で大體整頓してゐることは、前篇に書いた通りである。出生後に著しく發達する所は、大脳に於いては髓質部で、又小脳は此の時まだ成人型に近いて居ないから顯著なる發達は其の後に屬し、而して既に滿三才前後に達すれば成人型を呈してゐる。これ、運動の調節を司るべき小脳は胎内に居る間は、何等の刺激も無く又、増長の必要も存しなかつたが、一朝、此の世に出で、四肢の運動を始むるや、こゝに急激の發達が促進せらるゝものと解せられる。

子供の脳髓

かくして子供の脳髓が其の造構上並に外形上に發育するに伴ひて、人間の子としての「たましひ」も愈其の光輝を發出し始める。

抑「人間の靈智は、發現すれば必ず運動となる」。換言すれば「何等の運動無くして、人の靈能を知る方法はないのである」。こゝに謂ふ所の運動とは廣義の意味で、言を發すること、目視すること乃至著作其の他一切の努力、皆一種の運動に外ならない。而て、かゝる何等かの行爲や事業が無くば、所詮、其の人の才能は之を知る由も無いのである。

けれども、又之を狹義に解して、單に泣いたり笑つたり又は手や足を運動するの意味としても、實に、これは子供の脳髓發育を窺知する唯一の門戸である、嬰兒乃至小兒童の運動所作を精密に觀察して、彼等の精神態發育の度を付度し得る。

そこで、赤子の「たましひ」が最初はむしけら同様に、何等の活動もせずして、朦朧としてゐるのが、其の生長につれて逐次、外界の刺激に對して敏速に反應するやうになり、又自ら慾望を發起して種々のことを要求するに至り、やがて複雑なる思考力をも示すやうになる。ソアナア Winton 氏は次の例をあげてゐる。

「ある生後十八ヶ月の子供は兩の手に玩具を持つてゐて、しかも、またも一つ取らうとした。そして、片手の玩具を速かに膝の間に挿んで、それから第三の玩具の方へ手を差しのべた。」

此れは小兒が其の取るべき方法を考案して、行動に出でしを示す一例である。尤も子供の心が、もつと單純なる時は、兩の手に玩具を持つてゐても、目に他の赤いおもちゃでも見たら、其の場で、手の中のもの

忘れてしまつて、手をひろげて新しいおもちゃを取りに行くにきまつてゐる。これは、尙小兒心理が全く刹那々に外物の爲に變動しつゝ、前後の動作には一向、關係や統一の存しないのである。これと、前掲の如き例とを混同してはならぬ。かの例では、一手の玩具を兩膝で保留してゐるのであるから、第一、第二のおもちやにも慾望があり執着があつて、しかもおまけに第三の物をも取らうといふ、甚、慾求心の旺んな事を認めるのである。

二、赤子のたましひの發育經過

「人の目は腦髓の出張所である」

「人の心は腦髓に宿る」

「人の心は當に其の眼色を見て判すべし」

此の三ヶ條は眞實事である。此の中、第二ヶ條の「人の心と腦髓」との關係は主として本書及び「腦味噌」に論じてあり、第三ヶ條は恐らく讀者各自が日常經驗する所であらう。又第一の「目は腦髓の出張所」なる事は、余の別著「家庭に於ける兒童の愛護」(第一〇六頁)に書いてある。

而て赤子のたましひの發育は、まづ其の眼の運き方、眼のつけ所を観察すればよい。又實に生後、最早く現れるもの、一つは此の眼に於ける運動である。之を實驗に徴するに、赤子は生れてから四五日間、靜に眼を開閉するが、何を見ることもない。眼の前で手を拍つても、之に反應して閉眼する等のこともせぬ。然るに二週日以後はやゝ物を凝視し得るが如くやがて眼筋運動も出来るやうになる。一ヶ月前後ともなれば眼

付きが餘程ハツキリとなり、随つて、手足の運動も活潑となりて、手中に置かれた物體を把握し、亦直ちに口中へ持つてくる。聴覚も亦發達して音響をきく。又此の頃から顔筋の運動もまづ口邊に現れ始め、追々前額部にも筋運動を認め得る。第二ヶ月の頃には、明暗に反應し、又兩眼が協同運動を行ひ、不快感に對する表情（涕泣）も明瞭となる。かくて第三ヶ月には五官に於ける刺激に依つて、子供自身の運動が調節せられてくるが、但、まだ一物を己が視野中に認ても手を真直に差延べて、之を保持せんとする運動は十分できない。つまり今迄の手足の運動はまだ偶發性のもので、特別に豫め慾望し、又は考慮して行ふのでない。たゞ、光るものを見せると、暫時、赤ん坊の眼を惹く。これやがて後來の「注意」ともなるものであるが、まだ目下は之を脳髓に印象して、跡を残すと

いふことがない。

然るに第四ヶ月以後となると、物事に對する注視の時間が長くなりて明かに注意力の現れ來りしを證すべく、又人々の顔を辨別し少くとも、平素親近の母親や、乳母等と他の見知らぬ人々とを區別して泣いたり、又、笑うたりする。今や子供は物を見ること、音をきくこと、而て之に注意することが統一的、共應的に行ひ得るやうになつた。例へば生後五ヶ月前後の子供に赤い色のおもちやを見せると、明かに目を之に注ぎ、その物の移動する方へ瞳を追はせ且、手を差し延べるのである。

喜怒哀樂の情は、素と原始的のものであるから、成人でも中々抑へ難い。そして之を忌憚なく發露せしめるのは無邪氣なる子供である。けれども更に幼若なる乳飲み兒に於いては、元來、其の感情が未だ分化して

居らぬから、其の喜怒哀の表情も甚単純である。まづ大抵は泣くか笑うか、又は其れの混合なる泣き笑ひである。そして不快感乃至恐怖感は第二ヶ月の頃から既に之を認め得べく、其の驚愕に對する感情は、偶、余が満十ヶ月と二十六日の女兒に就いて明確に觀察し得た。

R、K子はある日の午後、余等主客相對坐して會談せる卓子の側らに兩手を卓子(て丈低し)の邊縁にかけて立つてゐた。時に、どうした機みか左手が離れて、後方へのけ反らうとした。すると此の子は、さつと顔色を變へ、目を腫り、口を尖らせ、且、息氣を吸うて、如何にも驚いたといふ様子をした。この時の情態は全く大人に於ける表情と同じであつた。(大正八年一月七日)

三、幼童のたましひの發育經過

已に前篇に述べた通り、生後迅速に小腦が發育すれば、四肢運動に於ける共同作用も巧みとなる。さうすれば種々の慾望も満足し得て、愈々腦髓發育の刺戟となる。かくして相互に因となり果となりて、嬉しいことや、驚くことを經驗し、又之を心に保留して印象をなす。即、今迄の偶發的の無共同運動は有意味、且有効の行爲となりて、はや滿一年前後の子供のたましひは餘程判然たる發達を示すこととなる。余の實驗に因るに、

「滿一年九ヶ月の男兒(TH)は、此の頃大に嘘言をつくことに興味を覺えた。其の方法は、食事中に、つと立ち上がつてお尻をまくり」し

つこ」といふ。そこで親共は「オヤ／＼」とて便所へ連れて行く。何も出ない。又一口二口たべると再びお尻をまくつておしつこといふ。これを何度となく繰り返すので全く傍人を欺き、鼻明かすのが面白い。殊に此のいたづらをば御臺所で人々の忙がしくしてゐる時に、そこへ歩いて来て云ふので、傍人が「また、だまして！」と目をむいて見せるとさも愉快さうな顔付きをしてゐる」(大正六年十一月二十一日)

これも最初は人を欺くつもりでやつた事ではなかつたが、偶々小便が出なかつた。そして人々は「オヤ、とし様はだましたね」とかいつて面白く騒いだのが、さもをかした事のように印象したものと見える。即、彼に於ける印象、即、記憶の發達を示す好例である。ワアナアは次の話を書いてゐる。

「三歳の一男兒が、病臥中の母親のベットへ上つた。そして紐をベットに縛り付けて之を引張りつゝ、「お馬ハイ／＼」をやつた。其の翌日、彼は再び母親の病床へ来て語るには、

「おつかちやんは、キイキがわるい。坊はお馬ハイ／＼」と

これ彼が前日の事を記憶してゐた證據であるが、余の實驗では、もつと幼い子供にも次の例がある。

満二年、男子(T、H)は二三日前、家族三人連れて淺草へ活動寫眞を見に行つた。之を思ひ出したものか、人に負んぶされて戶外へ出て、電車がゴ／＼と走つて行くを見た時、

バアチャン、ゴ／＼、
トツチャン、ゴ／＼、

たましひ

カアチャン、ゴー、

と云つた。蓋し其の意味は「此の間、ばあちやんと、とつちやんとそれから、かあちやんと三人づれで、電車にのつて、ゴー／＼と淺草まで行つた」といふつもりなのであらう（大正七年二月五日）

右の如くにして、追々と子供のたましひが開発せられ、既に満三歳ともならば、走り、歌ひ、踊つて、いよ／＼いたづら盛りとなる。即、小脳も大脳も共に今や多大の發達分化を遂げて、今後は彼等兒童自身が、經驗や教育により、換言すれば適當の刺激に反應して、其の智能を進歩せしめる時期となる。此の邊の精しき消息は拙著「子供の愛護」に書いたから參照あれ。されば、左には簡單に經驗、實驗及び觀察に關する定義だけを擧げておかう。曰く、

「人の能力の發達は先づ事物を經驗するに始まり、之を觀察して其の所見を深くし、實驗に因りて其の知識を確かならしむるにある。」
而て

「經驗とは、其の能動的たると、受動的たるとを問はず、我が一定の事物に對して關係を有するに至る事である。」
それから

「觀察とは、五官器を通じて、一定の事物の性情、賦性乃至其れと周圍との關係を注意深く會得する事である。そして吾々人間に於いては此の際、視官が最、重要な働きをなす。」

即、觀察は一種の經驗であるが、依つて以て事物を注意して觀るといふ事が、とりわけ肝心なのである。次に、

子供の腦髓

たましひ

「實驗とは、一事物に於ける因果關係の理法を究めて、感覺的に之を

實證する事である。」

即、實驗は最、根本的、徹底的に智識を得る方法で若し理想的にだに實驗を行ひ得ば、それに因りて得たる智識は「眞」であるといひ得る。

さて人間の「たましひ」が靈妙不可思議の能力を發現するのも、畢竟する所は、宇宙の「眞」を把握し、之を體現し、而て之を發揮せんとする努力に外ならない。余は曰ふ

「人間のたましひの本性は『眞』の分化である。故に常に『眞』に合體せんとしつゝあり。」

故に

「人間のたましひの嚮ふ方向は『眞』である。其の爲めに努力する時は

『善』現れ、其を體現し得る時、こゝに『美』あり。」

是の如きは、余の信念である。幽靈のたましひは、暗い方へフラ〜と逍遙うて行くかもしれない。善美の人間のたましひは常に明るく光れる眞理を指して展びて行く。

子供の脳髓が益々發育成長するにつれて、其のたましひは是の如くに常に其の行くべき所を指さねばならぬ。「三つ子の魂百まで」といふ。今幼時に其指して行くべき道筋を誤らば、將來百年の悔を貽さん。

併しまた一步退いて考察せねばならぬ。元來、生れ來りし子供の脳髓は健なりや、はた病的なりや、如何に？ 既に病的に不足のある脳髓には、とても有望なるたましひの發達は期し得ない。余は讀者の注意を喚ぶが、上記の通り、生後一ヶ月乃至二三ヶ月の子供の四肢の運動は、何

子供の脳髓

等の目的もなく、たゞ唯其の當座の刺戟に反應して物を握んだり、眼を動かしたりしてゐたに過ぎぬので、之を偶發性運動といふ。所で此の偶發性の運動の存在することは、やがて有意味の行爲となる準備若くは其の經過中なのであるから、實は子供にとつて必要な事である。若し之に反して、斯かるわけもなしに手足を動かす如き運動がないとするならば其の子は身體に故障があるかも知れぬ。又腦髓に足らぬ所があつて、爲に刺戟に反應しないのかも知れぬ。後者だとすれば精神低格の兒童だと考へねばならぬ。

かくして白癡や、クレチン病、粘液水腫病乃至諸種の内分泌作用に故障ある等の兒童には不惑とはいへぬの人たる恩恵を享樂し得可き素質は無いのである。左に之に關して傳説と實例との二方面から物語て見やう。

第五篇 足らぬたましひ

一 日本に無き換へ子傳説の醫學的解釋

1 換へ子の傳説と夢魘

神隱しの傳説の一種とも見るべき、面白い説話が西洋には古來行はれてゐる。そして日本にはそれが無いやうに思ふ。即ち「換へ子」の傳説の事で、妖精が出て來て、人間の赤ん坊を盗み去り、其の身代りに別の魔性的の者を恰もほんとの子供の様に見せかけて置き捨て、行くといふ思想である。

我が國では「神隱し」だの「天狗さんが浚つた」だのといつて、前刻まで樂しく戸外で嬉戲してゐた子供が一寸の間に、どこかへ姿を隠してしまふ足らはぬたましひ

ふ時には、神や天狗其の他の魔物が引き連れて行つたものと考へる迷信は弘く行はれてゐたものである。けれども、其の代りとなるべき別の子供が取り残されてゐる様なことは決してない。全然其の姿を没してしまふのである。西洋の「換へ子」傳説は此の點に於て異つてゐる。我々には珍らしい思想だと思ふから、左に其のお話をして見やう。

妖怪だのは、どの未開民族にも存する思想で其の特性も種々であるが、就中北歐神話に多く見る所の妖精の特徴は、軀軀は極く小さくて、人間の様な格好をなし、好んで夜間に芝生で舞踏をしてゐる。そしていろんな悪戯をするが、殊に人間の子供に對して、「換へ兒」を行ふのである。

さて、どんな方法を以て、「換へ兒」を行ふかに就いては色々な物語が傳へられてゐる。或は母親や家人の知らぬ間にコッソリと盗み去るのも

あり、或は暴力を以て奪取するものもあり、或は計略を以て誘拐し、乃至夢魘を同時に惹起せしめる事もある。其の例を擧げてみると、

第一例 北獨乙の話であるが、或る農家に赤ん坊が生れた時、小さな妖精

共は、其處の牛の耳を抓つて、モウ／＼と騒ぎ立てしめた。皆の者は驚いて、何事かと牛の小屋へ馳け附ける。その間に一人の小妖精は家内へ潜み込んで、赤ん坊を換へてしまつた。そして今しも其の盗んだ子供を引渡つて行かうとした時に、折よく父親が房つて來て之を發見し、無理矢理に奪ひ返へした。子供の寢床には換へ玉が入れてあつたといふ。

此の話は、妖精が牛を騒がせて人の注意をそちらに向ける事を計略したが男の腕力の爲に、目的を達しなかつたといふ筋である。

足らはぬたましひ

第二例 昔々、北チャットランドの或る處に、夫婦の者が住んで居つた。妻は夜間、燈火を點けておくとどうも眠られぬといふので夫は室内を暗くすることを許し、其の代りに自分の腕にシツカリと、赤ん坊を抱いて寝た。それは暗黒中には、ともすると妖精が現れるからである。併ツイ、グツスリと夫も深寝人りに陥つた。そして、フト、腕を引張られたやうな感じを受けて、ビツクリして目を醒ますと枕頭に一人の丈の高い女が立つてゐる。又自分は兩の腕に一人宛、赤子を抱へてゐると、思う間に其の女の姿は消失した。併し二人の赤ん坊は依然己が腕に残つてゐて、どちらが自分達のほんとの子供か分らなくなつてしまつた。

つまりあの目が覺めた時、妖精が出て既に換へ玉を夫の腕に持たせ今

や、人間の子供を奪ひ取らうと、力を加へた時に、夫も無意識に力を働かせて、妖精に手渡し了せなかつたものらしい。パルチック海のリツアニア海岸には、此の種類であるが、もつと曲折のある面白い物語がある。

第三例 ある百姓の子供が、今まで睡つてゐた目をふと醒してあたりを見ると、二入のラウメが忍び込でゐる。ラウメとは此の地方の言葉で妖精の事である。一體何をするかと思つてみると、近頃生れたばかりの赤ん坊を、其の寢床から引張り出して、自分達の衣類で之を巻きくるみ、次に竈の手筈を持つて来て、それに赤子の着物を着せた。これを換へ玉に使ふ魂膽らしい、所で此のラウメ二人の中の、誰が此の換へ玉を元との寢床へ持つて行くかといふ事に就いて、喧嘩を始め、結局

足らはぬたましひ

二人してその手箒のお化けを擔いで行くことゝなつた。此の一部始終を見てゐた子供は妖精が隣の部屋へ行つて居るうちにすばしこく我が家の赤ん坊を己が寢床へ隠してしまつた。やがて妖精が戻つてくると、折角盗み出した子供が居ない。そこで再び喧嘩をやり出した。「お前がわるいから、こんな事になつたのだ」いや貴様だ。おれがこゝで見張りの番をしてゐるから、貴様があれを持つて行けというのに、その通りにしないからだ」など、頻りに口論してゐる。そのうちにコケコッコーと鶏が鳴いたので彼等お化けは、仕事の失敗した爲、孰れも不平ダラ／＼の體で引き上げて行つた。そこで、子供は此の家のおかみさんを喚び起したがなか／＼に目を醒さない。やつとの事でゆすぶり起すと大變に恐ろしい夢を見たとして、ハア／＼言つて居る。夢は自分

の胸の上へ丸太を乗つけられて殆ど呼吸も出来なかつたさうである。そして今のお化けの話をきいて、初めは信用しなかつたが、成る程子供が二人になつてゐるのを見て驚いた。其の一人とは勿論、箒のお化けの事である。

此の話に於いては、妖精ラウメが、他の品物(箒)を化かして、換へ玉となし、赤子を人知れず盗まうとしたが、内輪喧嘩の爲、失敗して夜が明けてくるので退却した事を表はしてゐる。度々策略を廻らす例としては次の様な話がある。

第四例 一人の女が子を産んで間も無い或夜に、「火事だ／＼」といふ聲が聞える。皆は産婦と嬰兒とのみを残して「どこだ、どこだ」と飛び出す。併し一向何事も無いので、家へ戻つて見ると、赤ん坊が闕の上には足らはぬたましひ

落ちてゐる。

其の翌年また一人の赤ん坊が生れた時に、家畜の小屋の中でけたまし
い聲が聞えた。一同はスワ、家畜でも逃げ出したのかと馳けつけて見
ると何でもない。そして一人取り残された赤子は抱き起されて何處か
へ伴れて行かれやうとした時に、皆が歸つて、子供は入口の真中に落
された。

所がそれから程経てまたく大騒ぎの音が牛小屋に起つた。家人は
前の事をもうすつかり忘れてゐたから、矢張りだまされて、飛び出し
たのである

すると何者とも分らないが、自分の兒をスーツと引き上げて行くので、
之を取り返へさうと身を悶くけれども自由が利がない。懸命の聲を振

り絞つて側らの乳母を呼び醒まさうとするが、グツスリ寢込んで中々
起きさうにない。さうかうしてゐる中に夫が歸へつて來た。我が側
は、依然赤子は横はつてゐるが、いつのまにやらスツカリ變挺なもの
に變つてゐる。貧弱に瘦せこけて、干枯らびた畸形兒になつてゐる。
しかも眞裸である。そしてほんとの我が兒の衣服は御丁寧にも其の場
に捨て、あつた。

右の物語中で注意すべき點は、妖精が繰返して子供の惡戯的な計略を
試みること及び母親は其の事を知つてゐても、魔れと同じ様に力の出ぬ
こと、而して換へ玉は甚だ惡變してゐる事等である。

尤も時には換へ玉が全く同じでどちらが自分の子だか見分けのつかぬ
事のあるのは既に第二例に述べた通りである。又妖精が暴力を用ゐるこ
足らはぬたましひ

とは第一例に於ても窺はれるが尙次の例でよく分る。

第五例 或る家で両親が皆出て行つたから、子供が留守して小さな妹を見張りしてゐた。時に竈の後ろから一人の女が現れて、其の赤ん坊を渡せといふ。子供は否だと拒む。それでも、かの妖女は搖籃の方へ近づいて、無理に奪はうとした。子供も中々大膽な兒であつたから、ナニ手渡すものと防いだので、とう／＼妖女は目的を達せず去つた。さてこんな馬鹿氣た話が事實で無いことは、言ふ迄も無いが、大體、如何なる人間にかゝる説話の發生を見るかといふに次の四種を挙げ得る。第一に、腦髓の發達未だ不十分なる者に於いて、例へば未開人だの、小兒がそれである。第二に腦髓の疾病乃至衰廢の經路にあるもの。例へば精神病者、殊に早發性痴呆や、ヒステリイや癲癇乃至抵格者に之を見る

のである。第三に腦髓が一時的に疲憊し、又は其の中毒状態にあるもの。例へば普通人も睡眠中、又は飲酒して酩酊した時など。第四に無智識又は無教育の爲に、容易く迷信を起す者に於いて。右の四種の人間は、自ら種々の妄覺や妄想があつて、聲無き所に神佛鬼魔の聲を聞き、影無き處に妖怪の姿を認め、又己が心の中に百鬼横行の光景などを畫くのである。

たとひ病的で無くとも、小兒などは、ともすると白晝夢とて目を開いてゐながら恰も夢を見てゐる如き情態に陥る事が屢ある。其の實例としては

【参考例一】 T、U氏の自家經驗であるが、四歳前後の時、二階でひとり遊んでゐると、突然障子の破れ目から、ニョキツと大きな眞黒な足らはねたましひ

手が指を擴げ掌を開いた形で現れた。これはおばけの手であると思
うたさうである。彼は今や成人して二十七歳であるが、今日でも當時
見たものは、果して何であつたか、判然しないといふ。

【参考例二】 余自身が、八歳前後の頃母が大病で自分のみ獨り別室で
淋しく睡眠せねばならぬ事があつた。其の時殆ど毎晩夜中に目を醒ま
すと、己が枕頭約二三尺の空を三つの一尺内外の小さなお化けが左
から右へ順々に二三尺の間隔を以て通つて行く。其の姿は、明細には
見えないがボンヤリ白くて、人間の様な形である。これは目を見開い
た時に見るのであつたが一種の幻覺であらう。

【参考例三】 同じく余自身の例であるが、五六歳當時の夏の夜、いざ
就寝せんとて、蚊張の中に這入ると、いつも脚下、右の室隅に大中小

の小坊主が立つ。一番大きいのは、三尺位で以下二三寸宛程小さい。
是の如き小兒に於ける實例と、お伽噺に出てくる妖精などは、甚よ
く似てゐる、且又、殊に婦人達が夜間にうなされて、恐ろしき者の姿を
見、自身は之を逃避せんとし、又救を呼ばんとして、思ふ様に發聲動作
の自由の利かない事も、世人がお互に實驗してゐる所であらう。左に念
の爲、余の蒐めたる實例中から一二を引證しておかう。

【参考例四】 一婦人H、H子は睡眠中、誰とも分らぬ男子が來て其の
夜具の上から抑へつける。苦しくて堪らぬから「イヤー、イヤー」と叫
び聲を出して、自ら其の聲で覺醒した。(大正四年六月二十日)

此の夢魘の際は明け方で余は洗面所へ行かんとて廊下を通行中であつた。
そして余の耳には長く微かに「ウーン〜」としか聞えなつた。

足らはぬたましひ

【参考例五】 同じ婦人。一夜、十一時頃就眠後まもなく、脚卜に、つと一人の黒き者の影が現れて、手を以て上蒲團を、スツ／＼と下方へ引き下げる様に感じた。氣味わるく恐ろしいので、両手に力一杯、其の夜具を掴んで、之に抵抗しやうとするが力及ばず、苦悶して目醒む

(大正四年七月)

此の夜は側らに下婢が寝てゐて、しかもまだ睡入らなかつた。それで今脚下の方へ誰か来たらうと聞いたが、勿論、其の答は否定的であつた。こんな風に夢囈に於いては妖怪的のものが現れるのは、恰もお伽噺にお化けが出るのと類似してゐる。

所で右の如く、比較論をなして、第一に所謂妖精の姿や性情が、小兒や夢魘や心疾者に現れる幻覺的の現象に似てゐる事、第二に、妖精の行

ふ所はまことに幼少の兒童がいたづらをするのと似てゐる。即小兒心理の一相である事、第三に好んで暗き夜間に現れ、又晝間でも人々の不在にして、子供などに取つては、淋しい、怖ろしいと思はしむる如き情態に於いて發現すること。これも小兒心理の一相である。即之を要するに、本篇の傳説も精神情態異常時乃至未發育時に於ける迷誤的現象だと説明し得る。併し讀者よ、これだけでは童話發生に關する一般論に過ぎないので一向、此の特種なる「換へ子」傳説の骨子には觸れてゐない。即、北歐等の妖精は何故に小兒を交換して行くかを解決しないでは讀者に取つても甚あつて無に違ひない。余は是れは上述第四種の理由として挙げたもの、即、無智識なる者に於いて見る場合で、特に醫學的知識に關したる事に屬すと考へる。そして、諸傳説中の換へ玉をば、これか

足らはぬたましましび

ら醫學的に診察して、旁々、換へ子傳説の解釋を試みやうと思ふ。

2 醫學的觀察

妖精が換へ玉をばらして、人間の子を盗み去る所の「換へ兒」の迷信は、其の發生上の説明に大に醫學的觀察を要する點がある。まづ左に其の著しい例を擧げて見やう。

【第六例】或る夜二人のストラスベイの密輸入者等が、グレンリヴァットと云ふ處で、ウイスキーの荷を積み入れて居つた。時に突然搖籃の中に赤ん坊が、恰も打ち殺されでもしたかの如きけたまひ、聲で叫んだ。母親は、勿論神の名を呼んでお祈をした。ストラスベイの若者共も其の後は、此の事に就いて別段氣にも留めずして仕事を續け、やがて荷物を持つて歸途に就いた。然るに、餘り程遠からぬ處まで歩

るいて來た時、路傍に一人の可愛い、丸々太つた赤子が落つこちてゐた。彼等は之を直ちに、かの友人の家の子供だと氣が附いた。そして、成る程さつきの叫び聲は、あれだつたなと首肯したのである。即例の妖精が出て來て、此の赤兒を盗み去つたのであるが、母親が、神の名を以て祈つたから、遂に之を打ち捨てねばならなかつたらしい。そこで彼等二人は早速此の子を拾ひ上げて、これから再び元の道へ引き返へす餘裕も無いので、重ねて、グレンリヴァットへ來る時まで、自分達の許で養育する事にした。偕此の次に、同地へ此の子を伴うて、まづ何喰はね顔で、其の母親と話し合つて見た。母親の語らく、先達で、あなた方が御越しになつて以來うちの赤ん坊が病氣して容態も大變わるく殆ど恢復の見込みがありません。母親が、斯う言つて居る

足らはなぬたましひ

間にも、其の赤ん坊は絶えず、泣き叫んで、如何にも其の物語りの通りに見えた。そこで、かの密輸入者はこれを、御覽なさいと許りに、丈夫さうな、いき／＼した、ほんとの赤ん坊を其の母の前に出した。そしてかの時の出来事を語つて、その弱々しい病身の子供は實は換へ子であると告げた。乃愈々、此のお化けの正體を露見させてやらうとの相談となる。まづ楊柳製の編み籃の中にその換へ玉を入れ、其の下に薬を敷いて火を點けやうといふのである。事態險惡なりと見て取つた、お化けめはこれは堪らぬと思つたものか屋根裏の風穴から飛び出し、「あの二人のお容さへ來なかつたら、こんな失敗はなかつた筈だ！」と、減らす口を叩きながら、逃げ失せた。

此の例に於いて 四つの注意すべき事がある。一には換へ兒を行はうと

しても母親が神の名を呼んだ爲に、折角盗んだ子供を路上に遺して行つたこと。二つには、換へ玉になるものも一種のお化けであること。三つには、換へ玉を発見する方法として、火あふりにして之を苦めること、——此の方法は古來我が國でも行はれた事で、余は別に論じやうと思ふ——四つには換へ玉の子供は甚病弱の體軀を呈した事。此の第四の點が余は今こゝに問題としてゐるのである。もう少し例を引いて見やう。

【第七例】 ウアルドロンに著されてゐる、物語の中に左の様な話がある。即凡そ天下に此れ程美しい顔はあるまいと思はれる兒童があつた。年は五歳か六歳で、一見丈夫さうである。けれども、一向立つことも、歩くことも物を言ふ事も出来ない。否全身不隨でまるで一寸の身動きだも出来ないのである。而て其の手足は年の割合に馬鹿に長大である。足らはぬたましひ

が軀幹は六ヶ月の赤ん坊程も無い。彼の顔色は全く良い、そして髪の毛は如何にも美しい。斯くして、此の子供は語らず、泣かず殆ど何も食はず、又ニツコリともしない。けれども、若し人が彼をお化だと言ふと、彼は顔に皺を寄せ其の人の顔をしみじみと見入るのである。此の子の母は赤貧で、時々彼を打ち捨て、おいて終日、賃働きに出る事がある。近所の者は、かういふ時に、好奇心からチヨイ／＼窓から覗き見すると、いつも此の子供はグラ／＼笑つて、大變嬉しさうである。それで、人々は皆何か妖精の様なものが側に居つて、彼を遊ばせてゐるに違ひないと考へた。又此の考へを確める條件として、母親が家を出る時には、子供の事をかまはずに、きたないまゝにしておいても家へ歸つて來るといふもきれいな顔をし髪もチャンと梳づつてあ

つたといふ。

右の話に表れてゐる事は、容貌は寔に人並勝れて整つてゐるが、四肢が長くて胴が短く、且全身不隨で人の居らぬのに、グラ／＼笑つてゐる。故に訖度、變化の物が側についてゐてさうさせるのだらうと人々が迷信したといふのである。醫學上から見れば、こんな子供は腦神經系統に發育不良乃至故障の點があつて、運動機官が全然不能であり、而て精神状態は低格的である事が多い。つまり是は白癡などが自分一人で、わけもなく笑つたり、獨語を發したりする現象で其の他精神病者にも毎常認められる事である。昔の人はこんな者を見ると、他の人間には見えないが、一種の妖怪又は神佛の類が憑依してゐるか、乃至其の人のみに見えもし、語りもするのだらうと思ふ。そして色々な迷信が發したのである。此の

足らばぬたましひ

點についても只今は詳論し得ないから、他の稿に譲る。兎に角、彼等白痴等の低能者や、精神病者は全く外界に理由なくして泣いたり笑つたり、獨語をする。又、何か目や耳の感覺に刺戟があつて、無き物を見聞したり。又誤つて之を認識する。換言すれば空笑や幻覺や錯覺の類は彼等心疾者の最、屢、有する症候に過ぎないのである。又かゝる人間には、ともすると變質徴候と言つて身心上に畸形や缺損が存在する。かの獨逸の物語の中によく出てくる所の大きな福助頭や、頸の太い者乃至ラブランドに於ける換へ兒の手足が生れて間もなく四尺位にも達し、而て口はさつぱり利けず、しかも人の言ふ所はよく理解するなどといふ物語は、極端に述べてゐるのであるが、事實上にもかういつた子供が生れる事もある。現に最近余の實見し得た一實例を左に書いて見やう。

【参考例第六】 十二歳の男兒K、K。本人の同胞は他に六人あるが大體に健康で殊に精神病の者無し。本人は白痴で其の能力の程度も殆んど四五歳の幼兒の如く、絶えず外出彷徨し、唱歌、空笑、獨語してゐる。生後一年許は全然他の健兒と區別なかりしが、追々其の發育の度の甚しく遅々たるに心づかれ、歩行は一年半頃に漸く出来るやうになつたが四歳になつても他の兒童の如く自ら下駄を穿くことを知らず、又就學年齢に達して後も言語は殆完全と言ふを得ず。但、甚、大食する。而て此の患兒の特徴は、腕と脛とが長く、陰部長大で（七・五厘）毛が生へてゐる。

此の實例の如き者は、例へば身體の内分泌腺に故障があつたりする場合に往々見るので、此の際屢、其の精神の發育上にも同時に缺損がある。足らはぬたましひ

つまり此の患者に上述の如く骨端部及陰部の異常發育と精神低格とを認めるが尙、四肢肥大症を有する患者は、大脳の中にある下垂體といふ腺と、生理上及び病理上に密接の關係があるもの、如く、かゝる患者に大脳下垂體を服用させると輕快すると説く學者がある。而て又人間の咽笛に當る所、即ち甲状軟骨のすぐ下方兩側に甲状腺といふものがあるが、其の機能に故障乃至缺損ある時は、殊に顔面や又手や、太腿などの皮膚が厚くなり且つ腫張し、頭髮は薄く、音聲は嘎れる。そして、小兒に於いては、此の甲状腺發育不全の爲に精神の發達は勿論、其の他の身體上にも大障礙を來すので、この病氣をクレチニスムスと名づけてゐる。偕、余が換へ兒傳説を述べて、色々の引例をしたが、讀者は此等の物語中の換へ玉の情態が大に醫學上就中、精神科學上の疾病者なる、白痴

や精神病者や、クレチニスムスなど、似てゐることを心付かれたであらう。併し未だ醫學の進歩しなかつた時代の人の目に、不可思議の事として色々の迷信を發生せしめたのも無理はない。かの宗教改革で有名なルツテルも同じ様な迷信を抱いてゐた、彼はデッソウに於いて十二歳の換へ兒を見た事に就いて曰く、

【第八例】 其の子供の眼付きや、體部は格別、他の兒童と異つた點はないけれども、仕事といへば唯、食ふだけである。そして食物は大の百姓男の二人前をたべる。若し人が其の身體を觸れば、泣き出す。又家に何か凶事があれば嬉しさに笑うが、家内安全だと彼は悲しげに泣いてゐる。

そこでルツテルは説をなして曰く

足らはぬたましひ

「悪魔は魔力を以て子供を交換し、搖籃の中へ、お化けの子供になつた奴が這入るのである。そして動かないが食つたり飲んだりは出来る。併し一般に換へ兒は十八歳乃至十九歳以上は育たぬものである」。

まことに御尤もで、醫學的に觀察してもかゝる、病的の子供は發育不良榮養不十分で早晚病死すること多く、又、底抜けに多食する事も白痴などには常に見る所で俗にも「馬鹿の大食ひ」などいふ。

是を以て之を觀れば、此の換へ兒の迷信は、他の傳説や迷信と多少趣を異にして、大に醫學上に關する謬見や誤解が其の要素となりて發生したものでらしく、これに加ふるに余が既に上篇に述べし如く一般の童話に於けると同様に、腦髓乃至其の作用の異常時に於ける迷誤に基くものと説明すべきであらう。而て此れに就きては夢魔並に夢も亦勿論其の迷信

助長に干つて力あることを忘れてはならぬ。左に實際の夢に現れし換へ子を引照しやう。

【参考例第七】

S、K子(二十七)

は夢に其の實母と二人伴れて立派な

華族様の邸宅らしき所に訪れて来て、今しも多額の金員を受領した：

—云は、男女關係に於ける手切れ金といった様なもの——時に主人歸

邸したる氣配に、あわてゝその金や書類を懷中す。同家の令夫人來り

て挨拶し、「これからは度々遊びにお越し下さいまし」などいはる：

……(夢は一轉して)夢者は腕に薄團にくるんだ赤ん坊を抱いてゐる。

其の生死の検査を受ける爲に交番所へ來た。しかも奇なる事には、は

や腕の赤ん坊は子供用の枕と變じ、中は白米を以て盈されその表面に

赤ん坊の顔が描かれてある。……(大正四年八月十二日午前三時)

足らはぬたましひ

(の夢拙著夢學第七八三頁參照)

たましひ
右を以て大略「換へ子」迷信の醫學的解釋は試みたつもりであるが、尙、
もう暫く其の西洋に於ける分布や種類や、日本の迷信との比較論を掲げ
て見やう。

3 其の分布に關する説明

換子への傳説の起源は、蓋し、白癡や、粘液水腫症、クレチン病、其
他の内分泌作用の故障、又は精神病者や畸形兒の類を見て、其の醫學
的知見缺如の爲に、妖精に交換せられたものとの迷信を懐くに至つたの
であらうといふ事を前章に叙べた。所で何故に此の傳説が世界中で北歐
にのみ多いのであらうか？ これはまだ未解決の問題であつた。

まづ、本傳説の分布を観るに、最も多きは、スカンヂナヴィア半島、
英國、就中、スコットランド、それからオランダ、ドイツ、等で、一言

にいへば、北歐である。けれども、必しも北歐に限らず、アルプス山脈
の南方なる伊太利にもあり、又ギリシアにもある。更に海を超えて北米
合衆國の太平洋岸に沿へる高地の土人中にもあるといふ。

今上記の如き分布區域を観察するにどうも山地乃至高地が多いやうで
ある。これが大に大關係をしては居らぬかと思はれる。抑余が本傳説
を説明すべく上に掲げし疾病には風土病であるのが多い。例へば骨の畸
形を招く、ラヒチス即、佝僂病は日本でならば越後に多く、而てクレチ
ン病は臺灣の生蕃に多き類である。讀者よ、かの佝僂病は一名英吉利病
とも云ふ事と、本傳説分布との關係を知りて、思半ばに過ぐるであらう。
又クレチン病は他國に於いてはアルプス山系、其他山間幽僻の高地に
して、飲用水の不良なるものに發來すといふ。余は今、確實の數をあげ

足らばぬたましひ

て、其の双互的關係を立證するのではないけれども、兎に角此の兩者を同時に聯想することに無理はないと思ふ。而て如是傳説が一度び發生すれば、民族心理の關係上現に其の病的小兒を目撃すると否とに拘らず、之を口碑として傳へらるべく、又民族の移動乃至交通と共に、漸次他地方へ流通すべきは論をまたす。併し乍ら例へば、同じく北歐の山間にも臺灣の高地にも、クレチニムスが存しながら、一に此の説話表れて、他に發生せざるは如何に？ 敢て難問でもない。彼等固有の宗教的觀念や舊來の傳説的思想及び想像力乃至其素養文野の差等の上に同じからざる要約ありて然るのであらう。

而て、又實に、此の換へ兒傳説に、甚、キリスト教の臭味の加味せられたるを知るのである。即何故に彼等赤ん坊が妖精に奪はれるかの問

に對して其の弱小無力の可憐兒なる故に妖魔に乗せられ易しとの説明もあれど、主たる理由は、赤子は未だ洗禮を受けない。即、クリスチャンでないから、妖精が己が同類と見做して引き浚らうのであるといふにある。宜なる哉、北歐の俗間では、此の換へ兒を怖るゝ爲に直ちに牧師を聘して洗禮をうけしめ神の御名に因りて妖魔を拂はうとする。然らずとも或はスコットランドでは聖書を枕下に敷かして、或はドイツの一地方では單に聖書又は祈禱書の一葉を兒の搖籃に入れ、或は例の「天に在す我等の父よ」といふお祈りを捧げることもある。その他、主イエスの御名を呼び又はアイルランドでは十字を切り、聖水を載くこと乃至、ピカデーに於いては牧師に依りて徳つけられし珠數を利用する等、種々雑多の方法はあるが、所詮はキリスト教的に換へ兒を取扱はんとするに過ぎず

足らはぬたましひ

たましひ

ない。今左に例を以て示せば、

【第九例】アイルランドの或る處に某家ありて、其の家屋の闕の部分
が古來、聖なる所と云ひ傳へられ、未だ嘗て邪鬼の徒は近づき得ない
のであつたから、例の妖精も今迄二度ばかり、此の家の乳飲兒を奪は
うとしたが、其の度毎に目的を果さなかつた。三度目には賢くも窓か
ら忍び込んで今や赤ん坊を外へ連れ出さうといふ段まで成効した。此
の時丁度、折善くも——妖魔にとつては、邪魔な事にも、隣りの主婦
が訪れて来て、何心なく「あ、此處は、神様の常に御加護のある所だ
ね」と獨語した。其の目の前へ、ヒヨイと赤ん坊が突き出されたので
ある。全く面喰つたが、直ちに其の子を己が手に收めて、其の夜は自
宅へ戻つて行つた。

翌朝、試みに同家を訪問してみると、其の家の母親は大騒ぎしてゐる。
「ゆうべから子供がね大變に機嫌がわるくて、あの通り、泣いて泣いて
泣き通しですの」と。「なにさ、あなた馬鹿々々しい、そんな子供はウ
ンと捧ではたいて、四つ角へ引曳つてつて、泥溝の中へぶつ込んでお
しまひなさい。ね、ありやお化けの子供ですよ。あなたのほんとの子供
はちやんと私が預つて居りますから、御安心遊ばせ」と。之を聞いた
母親は、「エッお化けですつて、いまくしいッ」と奥へ棒を取りに馳
け込んだ。其の間にお化けは逸早く消え失せて、あとには何も残つて
ゐなかつたといふ」

一般に話の筋は、かういつた調子であるが、勿論常に必しも宗教的に
のみ物語られない、随分慘酷な思想を藏してゐるのがあつた。即イングラ
足らはぬたましひ

ンドでは魔女がまだ洗禮の濟まぬ幼兒を窃み去つて之を煮て、ヂエリイとなし、油や膏藥を製造して、或は酒のさかな、或は己が身體に塗つて、魔力を得る方法とするといふ。又シリア人の迷信中には、魔女がまた未洗禮の子供の手をば其の魔術に使用するとしてゐる。

右に類する思想が、朝鮮の巫女に關しても見出し得る。即ち「朝鮮の巫女は窃み來りし幼兒の身體を縛つて、少しも食物を與へない。しかも其手の殆、届く處に食を見せしておく。憐れな子供はヒイ／＼と日々夜々泣叫んで、ひもじさの餘り手を延して目前の食物を掴まうとするがどうしても取れない。かうすれば子供の凝つたる妄執は其指端に集つてゐるから之をブツツリ切斷して箱に秘藏し。巫女は之を利用して己が通力に使うのであるといふ。」

其の他妖精が換へ子を行ふ所の目的をば、妖精自身の子供に對して人間の乳が欲しいから、乳ある母親から、其の子を奪つて、お化けの子供を當てがうとも説明してゐる。随つて其の防禦法も、神の名を呼んだりせずして、單に鋼鐵のもの——ナイフでも火箸でも、剪刀乃至鋏刀、それから釘類などを用ゐる。ブルガリアでは鎌を室隅に置くさうで之に似たる惡魔除けの迷信は日本にもあるので、現に、死者の枕頭には刀をおくことは關東及び關西に亘りて割合に弘く行はれ、又志摩の國では産婦の枕許に稻荷除けとして短刀をおくことは「日本奇風俗」に出で、瘡を治する爲には病人の知らぬ時に剪刀を枕下に入れるなど、恐らく同一の思想であらう。而て藤原時代に既に刀を以て産所の守護としたること、紫式部日記の後一條院御降誕を記す條に左の文がある。

「宮は殿いだき奉り給ひて、御はかし、小少將の君、虎のかしら、足らぬたましい

宮の内侍とりて、御さきさまにまゐる」

こゝに、みはかし、即刀の外に、尙虎の頭を魔除けに用ゐたことが分る。この風俗は後世、足利義勝誕生當時に至りても存せしことは、其の「御産所日記」に記されてある所で、又俗間には子供のおもちやに犬張子を用ゐしも、蓋、この虎の頭からの轉訛であり、又、子供を夜間、外出に伴ふ時、額に「犬」の字を書き、之を「インノコ」と稱することなど、みな同趣旨に依る迷信である。梅園日記卷の三に書ける、「婦人養草に犬張子といふものは産屋に用ゆる器なり。産衣を先づ此の犬箱に著せ、はじめて其の後子に著する。箱の内へは守札等、又は産屋にて用ゐる白粉壘紙又は眉はらひなど入るなり。といへり。此の犬はり子も亦まじなひなり。又額にかくは、荆楚歳時記に八月十日四民竝以朱墨、點

小兒頭額、名爲天灸、以厭疾と見えたる説をも合せたるにや。養生類纂に瑣碎録を引きて、『小兒額上、寫八十字、此乃旃壇王押字、兒崇見則廻避』とあり。是も似たる事なり。といふ諸條を参照すべきである。

さて、ミツチエル、インネス Mitchell-Innes 氏が支那に於ける換へ兒のまじなひなりとて報告してゐたのを左に紹介しやう。

「バナナの皮を乾かして、火に焼盡し、其の灰をば水に入れる。此の液の中に指を差入れて、睡つてゐる子供の額に十の字を書くのであるさうな。——此の思想の起源は、鬼のたましひも人のたましひも睡眠中遊行して居る。故にまづ面上に従前有らざりし記號を附して、遊行せる悪鬼のたましひをして覺醒時に戻り入る所に迷はしめんとするのに足らばぬたましひ

たましひ

ある。尤も子供の眞實のたましひも見馴れぬ面相を見て大に迷うて、また他の方へ行き過ぎるかも知れぬ。だから、今や、小兒のたましひが戻つたといふ時に逸早く額上の文字を洗ひ落さねばならぬ。之に成効すれば子供のたましひが復歸するが、丁度よき機会に當らぬ際は子供は其のまゝ死んでしまふさうである。」

讀者よ、此の最後の話は、後文「たましひの怪談及び迷信」に對して好例となる。其の時、再び參照せられよ。以下、暫く稿を改めて、實地に余が經驗したる實在の人物に就きて、其の足らぬたましひの驚くべき事實を物語らう。

二 恐るべき白癡や變質者

1 千軒を焼いた白痴者

明暦三年に於ける江戸本郷の振袖火事に亞ぐ大火災が去る明治三十一年に同じく東京本郷に發した。幸ひに焼死者こそ寡かつたが、全焼の厄に逢ひし家は一千五十五戸、半焼は四十一戸、三月二十三日の午前三時に發火して朝の八時にやつと鎮火したのである。此の慘禍は實に推定年齢九歳、姓名不詳なる痴愚の一少年の手によりて成された仕事である。しかも次の如き恐るべき無鐵砲なる動機による。

彼の自白せし左の言を聞かれよ。

「此の夜おれは、春木座の側にある煮豆屋（實は春木町一ノ五十五なり）の裏の納屋へもぐり込んで菰を被ぶつて寝た。夜の十二時頃小便したくなつたから、表へ出てやつてゐると、そこへ通りかゝつたのは印判纏を着た四人の男足らはぬたましひ

である。おれはあいつらに見覺がある。一人は下谷の萬年町の紙屑拾ひで、も一人は魚の腸拾ひ、それからあとの二人は其の子分である。おれの顔を見て親分の奴が「オイ、一つ放け火せぬか？ こゝに十五錢あるから褒美にやらうわ」と目の前へ見せつけた。おれはそれを呉れと言ふと、すぐ様、きやつはマチと石油とかんな屑に炭などを入れた竹籠を渡したから、おれは、納屋の真中へ火の起るやうに仕組んで、火をつけてやつたのだ。見てゐるまにバツと燃え立つたよ。さうだね、一面の火になつた時は、あんまりいゝ氣持ちでもなかつた。」

勿論、右の教唆者四人は一時逃走したが、まもなく引き上げられた。そして馬鹿の少年は其の場でウロ／＼してゐる處をすぐさま捕へられて、爾後今日に至るまで巢鴨病院に收容せられて、今年は三十一歳である。院

内では彼を假に新六と通稱してゐる。

こんな種類の人間にして若し女子ならば淫賣婦の群に入つて、風紀を紊し、病毒を傳播する、其の著しき一例は大正五年七月廿日の萬朝報に載つた左の記事を見られよ。

2 五百軒の酒屋から麥酒を詐取した十四歳の少女

近頃市内各處の酒屋から巧に麥酒を詐取して歩く少女がある。各署ではかねて警戒中の處、去る十五日午後一時半頃、小石川區十一 吉野屋といふ酒屋へ、メリンス友仙の浴衣に肩揚げした十三四歳位の少女がきて、「私は裏の市浦から参つた者ですが麥酒を二本下さい」といふ。其の容子が如何にも怪しいので、主人の小林光藏がそつと後を尾けて見ると果して詐欺を働く女だと判つた。直ちに引捕へて富坂署へ

足らはめたましひ

突出す。同署の吉川警部補が嚴重に取調べた結果、是迄市内各所の酒店數百軒を惱ました少女は此の娘だと知れた。

少女は宮城縣の生れで小林清一の長女お兼(十四)といふ。父清一は一昨々々京橋區に高砂屋といふ藝妓屋を始め抱妓の六七人も置いて相當に暮らしてゐたが、好きな投機に手を出して失敗した果が一家離散の已むなきに至り、お兼は昨年三月頃から仙臺市の和成方に預けられた。併し都會の繁華な巷に人となつた少女は窮屈な田舎に一日も我慢がならず、同年九月大膽にも貨物列車の中に紛ざれこんで東京まで無賃乗車に成效した。それから一時淺草區町 福田屋といふ木賃屋に泊つてゐたが、食ふに困つてゐるい心を起し、牛込區神樂坂の藝妓屋から三味線一挺を詐取して日本堤署の手に取押へられた。其の

時十五歳未満で放置されたを良いことにして、わるい心は改らさず。

其の後淺草區町 千束のある婦人の同情を得て其の家に止宿してゐるうち、麥酒二本を盗んで附近の酒屋へ持ち行き「使物に貰つたのですから買つて下さい」と偽つて三十八錢に買ひとつて貰つたのに味を占め、同區町 淺草館といふ木賃宿に泊つて、昨年十月以來市内各所の酒店五百餘軒から、千餘本の麥酒を詐取してそれを他の酒屋へ賣却してゐたものだ。そればかりではない。茲に驚くべきは此のお兼は十三歳の時から既に男と關係して、現に數名の情夫を持つてゐることとで其らの金は悉く情夫の爲に入れ揚げてゐたのである。警視廳の杉江醫學士は變態性慾の上から此の少女の生理情態を觀察すべく、十七日富坂署に出張して取調ぶる處があつて、お兼は感化院に送られる

足らはぬたましひ

たましひ
筈になつてゐる。

現にこの所謂「お兼」は巢鴨病院に入院して、本年の四月は満十六歳である。文中姓名「小林」だの「かね」といふのは變名であつて、余は別著「婦人の覺醒」には、之を「とみ」といふ名を以てもつと精神科學的に觀察しておいた(「婦人の覺醒」の「賣笑婦」に就きては同書を見られよ。

此の不良少女は其の前の例と同じく素と、痴愚者であるが、また中には學業や技術に於いて、相當若くは卓拔なる才能を示しながらどうしても放蕩が已められなかつたり、淫亂であつたり、又は手癖の悪るい者がある。かゝる類を一般に變質者というて、やはり性來に屬する。これらは俗に所謂「足らぬ者」ではない。けれども所詮道德觀念に於いて、「足らぬ所」があるのである。故に余は左の盜癖者の例をも本章に收めた。

3 一二週間のうちに數千圓横領の秀才

「昨夕刊所報。大阪中央郵便局の雇員となり僅かの間に數十冊の貯金通帳を竊取して千圓を引出し公文書偽造詐偽横領罪に問はれたるH、M(十九)の兩親は何れも學校の教師を永く勉め、目下父は市外某會社の會計係を勤め母は彼が十一二歳の時死亡した。其の當時Hの下にはまだ幼き弟もあつたので父は數年間乳母を雇ひその教育には非常の注意を拂つてゐたが時々小使錢が失くなり遂には乳母の小使錢さへなくなる事があり、父は其の將來を案じつゝ後妻を迎へた。其の後Hは小學校を優等にて卒業し西區市岡町の住友徒弟養成所に入り製圖等を修學したが成績は依然良好で教師も大に矚目してゐた處、時々生徒の物が紛失しそれが圖らずも優等生の彼の仕業なること判り遂に養成所を足らはぬたましひ

退學する外なく大阪砲兵工廠に日給六十錢にて職工となつて木型と製圖に少年ながらも妙を得てゐるので一箇月経たぬ間に日給一圓を給せられた。然るに盜癖は止まず此處でも釘を持出して解雇せられた。度重なる不始末に正直一徹の父は我が子の將來を見限り一層死んで呉れたならとまで思ふたこともあつたさうである。左右してゐると昨年未中央郵便局で事務員の募集をしたので應募し一二週間の間に少年とも思はれぬ大犯罪を犯し、騙取せし金で高價な毛の襯衣洋服等を購ひ尙一部を貯金しその通帳は親に知れぬ様に疊の下に隠して置いて活動寫眞や飲食に消費したが横領金の内三百圓餘は何に使つたか分らない。Hの近親者は、「Hは學業の成績もよく、女にしてもよい様な美貌を持つてゐる。一二度女から手紙が來たことがありましたが、女の關

係は全然無い様に思ひます。親は本人とは正反對の嚴重な質なので、上等の品を買つても襯衣のやうな表に現はれぬもの許りを買つてゐたやうです。一時身體が悪くて紀州の温泉に行つてゐた時など親は不如意な生活から金を送つて居りましたのに父の心も察せず、どうしてあんな人間になつたか眞個に親泣かせです。(大正八年六月一日大阪朝日新聞)

寔に是の如き親子はともに氣の毒である。何分、其の本來の性の然らしむる所であるから、實際生れ替つて「たましひを入れ替へる」より外はあるまい。

余はまだ、こんな實際ならば澤山あるけれども、他日に譲つて次には、また實際問題を飛び離れた、たましひの迷信を研べて見やうと思ふ。

たましひ

鐘馗掣鬼圖

秋山玉山

深山之阿夕出雲。

凄風苦雨鬼成群。

小鬼跳梁大鬼笑。

高明之家來去紛。

終南高士面如丹。

青袍烏靴戕其冠。

十圍腰間三尺劍。

小鬼大鬼肝膽寒。

君不見白日椰榆鬼如林。

不獨女蘿薜荔陰。

第六篇 たましひの怪談と迷信 其の一

一 離魂病とろくろく首

物凄いお話であるが、古來、離魂病といふのがあつて「深夜、酣睡の時に當り心氣上騰し、別に形を結ぶ。頭上に頭を現じ、頸の長さ丈餘にして屏帷の上に繚繞す」といふ。つまり人が寢てしまうと、其のたましひが體外に出で、別に形體を結んで、頸の長い頭をスウィツと持ち上げ、屏風の上縁をあちらへユラ／＼、こちらへユラ／＼と遊動させてゐるといふのである。

恐らくこれは癡癩患者か、夢遊病者の類が、別人格となつて各般の行爲に出づることを怪談的に書いたものであらうと思ふ。いづれにしても、

たましひの怪談と迷信 其の一

斯かる夢遊症を起す者は事實あるのであるから、昔々の人々が之を不思議がつて、其の人のたましひが本體を抜け出るか、又は別體に依りて所作すること、思ふたのも無理はない。——一寸こゝに附言するが、支那の怪談めいたものを讀むと、この離魂病といふものと、飛頭蠻（即、日本ほんのろくろく首くび又は轆轤首）とは別物としてあるらしい。何となれば海東逸誌に據れば、飛頭は本と西域の蕃婦にして、目に瞳子なく、夜間頭を飛ばせて、人の熟寝を窺ひて、其の腸胃を食ふ。唯酸氣を忌む。故に土人は柑水を瀝して之に灌げば則ち敢て近かずといふ。又搜神記には吳將軍朱桓の一婢の頭は、能く夜、飛ぶとあるから、西域のみならず、支那本土でも此の迷信は行れたらしい。

二 古代人や未開人の魂魄觀

凡そ、人にはたましひとからだ、靈と肉とがあるやうに、二元的に考ふることは、古來何民族にも見る信念であつて、随分これと同じ事をば現代の多くの人の心中にもあるに違ひない。かの源實朝が「心のこゝろをよめる」とて

神といひ佛といふもよの中の人のこゝろのほかものかは
と詠んだ様な悟り方は、餘程後世になつてからである。日本でも古代に「たまし」を分ちて、幸魂奇魂、術魂、魂の三種とせしことは舊事本紀に據るべく又日本書紀には和魂と荒魂の二つを分けたことは已に本書の第四頁に書いた通りである。かくして神は皆な靈のみにして御身を隠し給

たましひの怪談と迷信 其の一

ひし由は記紀孰れにも表れてゐる思想である。

支那では魂魄といひて淮南子には「天氣を魂と爲し、地氣を魄と爲す」といひ又「魄は陰の神也」とあり。左傳には子産の言に「人生始めて化するを魄と曰ふ。既に魄を生ぜり。陽なるを魂といふ」と。此に因りて之を觀れば魂を陽に屬せしめ、魄を陰に歸せしむるが如く、新井白石は之を受けて、「されば人の知覺は魂に屬し、形體は魄に屬す」と曰つて居る。

右の如く、太古神代の昔より、近くは徳川時代に至り、又蒙昧の世の迷信より、鴻儒白石の鬼神論に至るまで、たましひに就いては似たやうな事を述べてゐる。たましいが他人の身體に憑るとの話も随分広く流行せる思想である。又、グリーンランド人は肉體に於ける「たましひ」と陰

影となる「たましひ」とを分け後者は晝は己が身の影となり夜は身體を離れて出遊すと信じてゐる。

又、佛教では「中有」又は「中陰」といふ事がある。これは前世に死したる後、次の生を受けるまでの期間をいふので、この間の人の身體は、恰も五六歳位の形量にして、體質、極めて微細の淨色より成るを以て肉眼では見えない。又其の期限は種々で瞬間の事もあり、七日乃至七々日の事もあり、又永久に續くこともあるといふ。随つて我が邦の俗間にも中陰といへば普通は七七四十九日の間を指し、此の時日中、死者の靈魂は尙宇宙に彷徨ふてゐるといひ、又時には死後七日を中陰といふこともある。之に就いて面白いのは南洋パンクス諸島の蠻人の迷信で、彼等の男子間にはスクエ會といふ秘密結社があつて、こゝに入るのを名譽とし、

又其の會員たるの資格を得る爲には一頭の豚を殺し、歌舞遊樂を催すことを必要とする。而て彼等は信すらく、若し此の會員とならねば死後、其の魂は大蝙蝠の如くに樹枝に倒懸せねばならぬと。日本でも、人死して其の魂が鳥となるとの迷信は、記紀に、日本武尊を葬りし御陵より白鳥が飛揚し、爲に諸處に三ヶ處の白鳥の陵の出來たことが書かれてある。その他、或は人亡して白蛇となるとのアフリカ蠻族の迷信や、女人は蛇體に轉生すとの日本舊時の俗信等數へ立つれば際限もない。

三 たましひ入れ替りの怪談

こゝに面白いのは、上記の如く、ふら／＼と肉身を飛び出した「たま

しひ」が、其の歸へる所を誤つて、他人の體内に這入つたり、又は双方で宿換へをやつたりする話である。

「昔々ある夏の日伊勢の國安濃郡内田村なる長源寺のお堂の縁で二人のものが、晝寢をした。其の一人は同地の者であるが他は日向の國の旅人である。餘程グツスリと寢込んだと見えて早や日は西山に入らうとしてゐるのに、二人とも目を醒さない。時に人有りて之を觀て、二人をよび起した。二人は同時にびつくりして跳ね起きたが、其の拍子に、今まで浮遊してゐた二人のたましひは、這入り場所を誤つて、お互に他人の肉體へ潜ぐつてしまつた。さうなれば、顔貌こそ元とのまゝなれ、心は全く交換されて、伊勢の人が日向の訛を出し、日向へ歸つた人は、伊勢の事ばかり話すといふ次第で、トンチンカンの事夥

たましひの怪談と迷信 其の一

しい。仕方がないから、再び同じ場所へ戻つて来て、前の如く晝寢して、漸く魂を夫れく舊體に還らしめたといふ。

これは和漢三才圖會の卷七一出てゐる。尙、續いて、次の話が出てゐる。

推古天皇三十四年三月壬午日、五瀬國黄葉縣の佐伯小經來といふ者が死し、三日三夜の後蘇生した。然るに日向の國の小島ノ縣に依狹ノ晴戸といふ者ありて、同日に死し、同日に蘇つた。而て小經來は日向の言葉を使ひ晴戸は反對に伊勢の事を云ひ、且、舊時の妻子、郷邑の名はさつぱり知らない。此の二人の子弟が互に相ひ訪れて、問合せて見ると、彼等の辻褄の合はぬ話がよく了解出来る。

蓋し、これは、右兩人が同時に死して閻魔大王の許に至りし所、孰れ

も未だ人世の命數盡きすとの理由で再び娑婆界に送り戻された。所が冥府の使者が其の案内を誤つて。舊宿たる肉身を取り換へたのであるといふ。

右に類した説話は支那にもあつて、聊齋志異や酉陽雜俎中之を發見する。此等の話は、一は人が睡眠中に其のたましひが遊離し、又人死しても、其の去脱せしたましひが還來すれば再び蘇生すてふ迷信を現すもので、謂ふにかゝる思想の發現は、一は夢を見ること、二は精神病が突然、睡眠の覺醒後發作する例が珍しからぬ事、三は夢中遊行により、又は癲癇患者として、別種の人格を發揮せしむる例も寡からぬ事に由るものであらう。尙、寶物集卷六には左の文あり。

「讃岐の國に依女といふ者有り。重き病を受て命終ぬ、父母悲みの餘り

に祭を爲たりければ、鬼共祭物を納受してけり。鬼神の習ひ祭物を受用しては空くて止む事無きが故に同名同姓の者に取替てけり。故の召人の依女を返し遣はずに、物騒しく葬送を疾く爲たりければ、犬鳥食散して跡形無りければ、今の召人が體に故の召人の依女が魂を入れてけり。即ち蘇生して物を云に形は我娘なりと云ども我を見知ず、物云ふも替れり、故の依女が父母此事を傳聞て行て見れば、形は我娘に非すと云ども我等を見知て泣喜び物云ふ聲違ふこと無し。此故に四人の父母を持たり。諸法の空寂なること今生すら如此、いはんや流轉生死の空寂推て知給ふべき也」

斯く魂魄が遊離彷徨すとの思想よりして、人の睡眠を醒ますに、漸徐にして、必ず之を吃驚せしめない様の風習を生せしめた。而てこれは

殊に貴人に應用したるもの、如く、宗五大艸紙（詳書類從卷四一三）には左の文あり。

「毎年節分に伊勢守宿所へ御成候。……又同時御成に供御過てそと御静り候時、同名備後守方に定りて障子の際へ、そと參り候て鶏の唱ふまねを三聲仕り雀の鳴まねを仕り候へば御ひる（起）ならせ給候て還御成候。定りたる事にて候」

と。これは足利家の公方を目醒しむる作法で、御寢所の外でまづ鶏のまねをなし、やがて雀の聲をまねして、其睡眠を漸々に破やうにしたものと見える。而て印度にも古來此の風習の存したりし事は、義淨譯の根本說一切有部毘奈耶雜事經、卷廿七にある左の語を見て知り得る。曰く「叔父に殺さるゝを虞れて禪提醯國へ走りし多足食王子は、途中樹下に

たましひの怪談と迷信 其の一

困睡した。其の時、偶々同國の王が死して嗣子無きが爲に大臣等、其れを得るに苦心してゐた。今や此の睡れる王子の非凡の相を見て、之を喚び醒ましたるに、彼は目を開いて『王を覺ますのにこんな無作法があるか』となじる。乃、諸人其の法を問ふに曰く『先づ美音の奏樂をなして漸次に覺悟せしめよ』と。皆、これ果して貧子に非ざりけりとして敬ひ、且其の血統を質すに、正に先王の甥たることが分り、喜んで立て、王とした。』

豊、印度のみならず、緬甸にも、睡人の吃驚は遊魂をして病ましめ、歸途を誤らしむといひ、塞爾維人は妖巫が睡眠中は、其の魂は蝶と化して飛翔してゐる、故に若し此の間に頭脚の位置を變換して臥せしめば、歸來するたましひは、入口を見失ひて、爲に巫人は死亡すといひ傳へてを

る。されば印度のボンベイでは睡れる人の面上彩色し乃至女子の口邊に鬚を描く等の悪戯は、其の罪當に殺人と等しと考へられてゐる。(Tiranz er, "The Golden Bough Vol.i, 1890)

四 アイヌの迷信、「ニタタ」

北海道のアイヌ人中に、ドスグルといふものがある。日本内地でいへば、巫女や、祈禱者の如き職業の仲間である。今では警察の干渉も有るから追々無くなつて行くさうであるが、それは他人の請ひに應じて、病氣の原因や、邪崇の由來を察し、其れに對するおまじなひを行ふのである。例へば一家内に病人ある時此のドスグルを招く。彼は先づ夢うつゝの如くになつて、喃喃たる神宣——アイヌ語では之をカムイ、チ、イタク

テといふ——の聲が出始める。やがてドスグルの身體四肢は追々震動し、
兩眼茲に豁と開けども、何物をも凝視することなく、恰も靈の世界と交
渉せるもの、如くにして、或は高音急調に、或は低音唸唸として病者の
是に到りし所以を説話するのである。

偕、面白いのは、此の時の傍人の行爲である。今や病床の周圍には其
の親族や友人が數多打ち集うてゐるが、右の修法の最中は各自、手ん手
に病人の身體を壓迫する。之を「ニタタ」といふ。これ、病根たる惡靈は
今行者ドスグルの祈禱で病體を脱出するが、其の際、本人の「たましひ」
も一所に飛び去つてはならないからかうしてたましひを引留めるのであ
るといふ、まるで人間の靈魂を風船玉の様に思つてゐるらしい。

是の如きたましひの迷信は山程あるが、殆全部割愛して、他日の機
會に譲り、左に怪談別篇を提供しやう。

第七編 たましひの怪談と迷信、其の二

——本篇には主として近代に於ける魂魄の怪談五篇を収めた。其中、第一の「七日正
月の不思議」と第三の「蕎麥を喰うた幽霊」とは、莉婁ひろ子が實經驗及び乳母より聞き
たる實話を親ら執筆したるものである——

一 七日正月の朝の不思議

今から四年前の正月七日の朝、六時頃、一旦目覺めては居たけれど、
寒いので、未だ床を離れ得なかつた自分は、不意に、オヤツと思つて頭
を擡げて耳を澄ませた。M子の寢て居る隣の室の縁側へ出る障子を誰か
無理にこち開けやうとしてゐる様な音を聞いたからである。眞直に引手
を持って、素直に開けられるのを、焦れ切つてゐる爲、反つて、目的を

達する事が出来ない様な物音であつた。次の瞬間、自分は吃度M子が、知らない間に廁へ行つて、今戻つて来た所だなど一人定めをして襖越しに見ると空であるべきM子の床に驚いた事には彼の女が静かに、少しも動いた景色もなく横はつてゐる。すると、それでは、今障子を開け様として居るのは……？ 自分は最早明かなくなつてゐる時間である事も、周囲が既に騒々しくなりかけてゐるのも總て忘れて一時にゾツとした。「誰？」 黙つて居るのが反つて怖しくて自分は高く呼んだ「誰ッ」とM子も鸚鵡返しに叫んで心持蒼い顔を擡げ乍ら自分を見た。此の時はもう何の物音もしなかつた。

「今障子をごたく／＼いさせたのはあなたぢやなかつて？」

「あら、私こそあなたが廁から歸つていらしたところだと思つてゐたの

に——、今あなたのところから、何か見えやしなかつて？」 M子は低い聲で云ふ。

「何かつてなあに？」

「縁側の兩戸は閉つてゐるの？」

「え、閉つてゐます。それよか、何か見えたつてなあに？」

「今障子を開けやうとした音が聞えたでせう？ やつとスーツと開いた

からあなたが、自分の床へ歸つて行くんだなと思つてゐると、それと

同時に急に私の夜具の袖が重くなつたから、あなたが悪戯をして乗つ

たんだと思つて「いやあよ」と云はうとして振り向いたら——」

「ふり向いたら？」

つまり、戸が開くと共にM子の眼に映じたのは黒い學生服を着て、片

手に帽子を持ち、片手に手袋を提げ悄然と立つてゐる若い嘗て見覚えのない青年の姿であつた。それはほんの一瞬、振り向いたM子を見下ろすと忽ち影の様に再縁側の方へ踵をかへした。その時障子を閉めて出て行つたかどうかは餘り不意な事件に肝をつぶしたM子の記憶には残らないう事であつた。然し後で調べて見たら、前と少しも違はず、キッチンと閉されてあつた。之を聞いた家人は皆風の音が猫が障子へあつた音だらうとか又は、M子がねぼけてそんな者が見えたんだらうとか云つて取り合はなかつた。けれど自分は不斷から決してねぼけたり狼狽へたりする事のないM子の性格から推して承知してゐる事と、今一つ自分自身も現に障子のガタ／＼云はせた工合からどうも人間に違ひないと變に思つて聲を出した位であつた事から考へると唯不思議でたまらない。

自分はM子に、その男の人は縦へ姓名や身分は知らなくても今迄に何處かで逢つた顔ではないかと聞いて見た。M子は嘗て見た事のない顔だつたけれどさう云へば、年齢の點から顔付きからすつかり異つてゐるにも關らずそれを見た瞬間に直覺的に故郷に居るYの様な氣がしたと云つた。その癖彼の女は其の前夜は勿論其の前からすつと、Yの事を思出した事もなかつたのであつた。

家人は半分疑ひ乍らも、やはり、何となく氣味惡がつて、沈んだ調子の中に春を送つた。それから少し経て後、故郷から來た人の話に、Yが丁度M子に現はれた頃、病氣で惡かつたといふ事を聞いた。

早く云へば、YはM子の夫の夫とM子の母、並にY自身でも殆ど決めて居た人であつた。彼はM子の父と同郷の好誼から、M子の家へ始め

て出入する様になつたのは、明治四十二年の春未だ浅い彼が廿四才の工科大學一年生の頃であつた。其の後三年間、Yにとつては前途の希望に充ちた楽しい日 flowed。M子の家でも彼の女の母は屢々訪づれる彼を子の様に愛して居た。尤も彼の女とても、彼が普通の青年と非常に違つたところのある、陰鬱な懷疑家で又氣分の轉換極りなき感情家である事はよく承知して居たが、一面又大變正直な情に厚い親切なところのある點をも観る事を忘れなかつたのであつた。然し、彼が工學士として社會へ一步踏み出した時には既に總ての周圍が一轉してしまつてゐた。M子一個の意志から、Yは永久に彼の女と離れなければならなくなつた。彼は都に留まる當もなく故郷N市に職を求めて去つた。大正元年の秋の事であつた。

歸國して後も筆忠實な彼は、時々M子の母宛に手紙を送つた。或時は婉曲な筆にM子との間の復舊を願ふ意を髣髴かした。又一度は「親達が生きりに妻を迎へよといふが、見渡す所M子さんに優つた人はいないから」などと、あらはにも書いてよこした。然し母もM子も遂に一言も書いて送らなかつた。

かう云ふ關係のあつたYの幻の現はれた年の正月は全く裏淋しく過ぎた。二月三月と過ぎ、櫻の花も散りかゝつた五月の同じ七日の日であつた。YがN市外にある××寺の裏手で自殺したのは。彼の懷疑的無信仰は遂に彼を殺さずには置かなかつたのであらうと思ふ。

二日して後其の報を得たMの一家は、さてこそと過ぎし正月の同日の不思議を何かの因縁であつたかの如く思ひ做すに至つた。此の時から、

自分は現代の科學では到底説明の出来ない神秘が此の世にある事を幾分信する様になつた。

一 怨魂體を借る話 (夜窓鬼談上より)

長尾杏生は越後新瀉の人也。家、世々軒岐之術を業とす。弱冠にして父に代つて患者を診す。某樓に一妓有り。お貞と名づく。久しく悒鬱の病を患ふ。偃臥數旬、客に接すること能はず。生屢々之を診視す。三月を閲して全癒を得たり。生、標致秀雅又談諧を能くす。常に人をして喜笑せしむ。お貞の癒ゆるは、藥劑の効に由ると雖、實は杏生の其の鬱悶を慰諭するを以てなり。一夜お貞盛饌を設け、生を招きて曰く、君の厚意に由りて枯骨に肉するを得たり。聊か薄饌を供して、將に以て鄙

忱を表せんとす。冀くは一抔を喫せよと。乃、諸妓を聘して歌舞興を扶く。生酔うこと甚しく玉山已に頽れ、杯盤狼藉たり。貞、水を與へ背を撫して曰く、夜深く兩催す、請ふ牀に就いて睡れと。生、未だ醒めず、乃、一室に入り、褥に坐して戯れて曰く、久しく客に接せずして、耦を思ふこと無きや、否やと。貞笑つて曰く懇に君の如き者無し、安んぞ耦を思はんや。生の曰く、卿若し僕を欺かすんば、僕亦誠を竭さんのみと。貞流涕して曰く、重恩の人、何を以てか之に報せん。君若し醜を棄てずんば、命を以て之に事へんと。生喜びて遂に同衾の歡を爲す。爾來、屢此に來り膠漆も雷ならず。稍、他妓の擲る所と爲る。生の父其の遊蕩を憤りて一時に斷念せしめんと欲し、貲を齎らして江都に遣り醫博士某に従つて業を研かしむ。生已むことを得ずして笠を擔ひて郷を去り、復

信を通ずることを得ず。お貞、聞いて大に歎じ、病再び發し遂に左明を失し、幾も無くして亡せたり、生、學に就くこと五年、父を省して郷に歸る。父其の遊蕩に懲りて急に某氏を娶りて之に妻す。生に弟有り。繼母の出と爲す。母、弟をして家を繼がしめんと欲す。生其の意を知り、妻を携へて再び東京に來り、業を下谷に開く。名聲漸く聞え、履屐門に滿つ。時に年四十なり。偶、左耳を聾す。百治驗無く、自、以て不治の症と爲し、復甚だ療せず。鄰巷に術者有り、能く吉凶禍福を知り、生と相ひ熟す。生、術者に謂つて曰く、余の聾を病むも亦、禍源有りやと。術者沈思稍久しくして眉を顰めて曰く、二十年前、一婦人を欺くこと無きかと。生曰く記憶する所無し、曰く此の婦、晩に左明を失し遂に悒鬱して死せり。怨念滅びずして今猶累を爲す。君其れ熟々思へと。生

愕然として始てお貞の祟を爲すことを知る。因つて具さに前事を告げて曰く、君は盛徳の人、怨鬼も近くことを得ず。然れども、一念の凝結する所、年を経て猶未だ銷せず、宜しく靈を祀り罪を謝すべし。乃、解怨の法を授く。生、則ち壇を設け、靈を祀り、香華を供して罪を謝す。且翰を書して曰く、余の盟に負きは已むことを得ざるを以てなり。卿、若し尙、余を慕ふことあらば願くば再生して盟を尋げ。然れども余年老ひ氣衰ふ。或は魂を容貌の卿に肖たる者に憑託せよ。今世復、前縁を果すこと有らん。我今子無し。幸に妾たることを得て一子を生まば、我の願亦足れりと。書し了つて之を壇前に焚きぬ。是れよりして耳聾稍軽く三年の後は全く癒ゆることを得たり。是より前、父歿し、生亦屢々郷に之く。十三年の忌辰を了へんとして、又郷に於いて祭を修したり。

歸途伊香保温泉に浴し客舎に在ること數日なり。婢有り。年僅に破瓜に垂んとす。而て容貌音聲、酷だお貞に肖たり。日夜飲食起臥の事亦甚務む。柔順優愛、生を慕ふに似たり。一夜更深け生未だ眠らず、牀に在つて書を讀む。婢來つて膏を加ふ。生戯れに婢に謂つて曰く、汝の容貌、酷、我が知る所の女に肖たり。知らず、何れよりか來れると。婢生の手を捕へて囁然として曰く、君、貞を忘ること無きや否や。生驚いて曰く汝はお貞の再生する者乎。曰く君の誓言を信じて、君の歸郷を待てり。圖らずも故病再び起りて遂に怨を呑んで亡せたりしも一念は滅びずして往いて君が身を惱ましたり。後君の書翰を得て再生を俟たず、體を此の女に借つて以て前縁を果さんと欲す。君、約を爽へずして速に相ひ伴ひ去れ、婢妾爲るを厭はざる也と。言ひ訖つて悶絶し氣脈斷えん

と欲す。生急に水を與へ藥を啣ましむ。少頃ありて豁然として甦る。生問ふ、言ふ所を記憶するや否やと。曰く知らず。唯、一女の體中に入るを覺え、復た怨を述ぶるを聴くのみ。生、姓名と郷里とを問へば、泣いて曰く妾の名は貞、高崎某士の二女なり。父母は姉と與に夙に世を辭して、田園家財盡く負債の爲に奪はれ、魄惺落魄、口を糊すること能はず、遂に此に來つて傭はる。主人、妾が薄命を憐み、且、其の玄弱なるを以て甚、使役せず、獨り考媽有りて裁縫を事とす。妾に就いて學ぶ。言ひ終りて獻歎し、雙淚袖を濕す。生之を憐れみ、遂に其の主に乞うて妾となす。主も亦大に喜び、爲に衣服妝具を貽り、駕を命じて之を送る。生携へ歸つて之を他室に置く。幾もなくして男を擧ぐ。生の妻子無きを以て之を愛すること己の出の如し。又貞を愛すること、妹の如し。貞長

するに及んで、言語舉動毫もお貞に異なること無し。數年の後、妻は病を以て殆ふし。死に臨んで生に謂つて曰く、貞の性、温厚謹直なり、妾死するの後は、請ふ貞を以て繼妻と爲し、他人を娶ること勿れと。是に於いて貞、妻と爲る、時に年二十有五なり。お貞の二十有五にして生に別れ、貞の二十有五にして正妻と爲る。亦奇也。友人青木氏余が爲に話す。

三 蕎麥を喰うた幽霊

北國のTといふ一寒村に於いてあつた事實である。或る寒い日の夕方、寺岡といふ家へ、日頃、懇意にしてゐる、近くの〇町の知人木村家の内儀がふらりと訪ねて來た。寺岡の妻は、久しい以前から、病氣だと聞いてゐた木村家の内儀が來たので、もう癒つたのかと思ひ、別に怪まずに

座敷へ通して、四方八方の世間話をして相手になつてゐた。日も暮れ方になつたので、主人も妻も、客に夕飯を共にする様に勧め、かねて、木村家の内儀が非常に蕎麥が好物である事を思ひ出したので、手打ちの蕎麥に熱い汁を添へて出した。客は大變喜んで、何杯も何杯もお更りをした。仕舞には、主人も妻も、病氣上りの人がと驚いた程、平らげてしまつた。やがて、暇を告げて、立ち上つたので、夫妻は、玄關まで送り出し、それから、今の座敷へと引きかへすと、二人は一時にアツと目を見合はせた。驚いた事には、つひ五分前まで、客の坐つてゐた座布団の傍に蕎麥が山と積まれてあつた。

その明けの朝〇町の木村家の内儀が、昨夕遂に病勢急變して其の時刻頃ころに亡くなつたとの報らせがあつた。

四 靈魂再來 (夜窓鬼談、下卷より)

筑前の國、那珂郡、老司村に左内なる者あり。農家の豪と爲す。性、慈仁、好んで書を讀み、常に隣人を惠み、専ら善事を修す。嘗て衆に語つて曰く、凡そ人の知らざるべからざる者は、死後靈魂の歸する所なり。地獄天堂の如きは本と是れ印度の古説、勸懲の爲に設くるのみ、識者の道はざる所、而て浮屠氏の徒喋々之を説く、人をして疑ひ且つ惑はしめざるを得ず。然れども、未だ一人の幽冥より歸つて其の苦樂を説く者有るを聞かず。我死せば將に必、再び來つて有無を告げ以て人の疑惑を解かんとすと。子弟村老、之を信せず、或は面従して陰に毀る者有り、或は約を堅くして告ぐるを俟つ者有り。兒孫半ば信じ半ば疑ふ。復以て意

と爲さす。既にして天保甲辰六月八十一歳を以て没す。長子左助、家を嗣ぐ、忌辰必ず佛事を修し、數年を経と雖、更に信なし。衆、咸、謂へらく、老人言を食む。徒らに人を戲弄するのみ。後十四年を過ぎて、安政四年四月某日其の孫兒、微恙あり、一夜卒然として褥に坐し、左助に謂つて曰く、余汝の父也、生前の約を果さん爲に、今、冥界より來れり。死後速かに來つて告げんと欲せしも、冥法嚴戒にして陽人と接するを得ず。今冥王の勅許を得て、將に以て冥事を告げんとす。請速かに親戚友朋を招き來れと。言語音聲、依然として亡父なり。左助大に驚き、乃使を馳せて、衆を招き、且曰く世に狐狸の類人に憑依して以て欺誑する者有り。願くは爲に疑を解いて其の證を示せと。兒、首肯して曰く、然らば則ち有する所の田園段畝を話さんと。因つて悉く之を述ぶるに毫も

遠ふこと無し。左助是に於いて益々父の神靈を信じ、恭敬之を待つ。既にして親戚朋友及び隣村の優婆塞等聚り來る。兒の曰く、我生前左耳を聳せり今尙然り。請問ふこと有らば、右邊より語れと。衆交々之に問ふに、皆之に答ふ。其の略に曰く人の死せんと欲するや太だ苦し。少焉して體を脱す。惟闇中を行くが如し。之を久うして明處に至るに清涼にして穢れ無し。快や言ふ可からず。而て人家村落の人世と異なることなし。各村には守神あり。神出づる時は則俯伏して之を拜す。何人なるかを知す。凡そ前死の人皆、集合して歡樂して遊戲し、談笑相喜ぶ。父母及び七年前死する所の妻、今皆同居す。業無く職無く、爲すこと無くして起臥するのみ。其の中に貴賤貧富の別ありて、生前或は學を修し、人を導き、施を好み善を積む者、皆、貴富となす。高樓大厦に居りて衆の尊

敬を享く。姦惡貪鄙にして行爲良しからざりし者は、長者の爲に役せられて常に勞力に苦む。竊盜劫掠、人を殺し、世を禍する者、別に一所に在りて今尙は鬪争已むこと無し。或は陽世に惡を爲し、死に至るまで露れざる者は、最も重刑を受く。此の輩は我が曹と處を異にす。詳かに知るること能はざるなり。但五十年前に死せし者は見ること無し。或は上界に至り、或は人間に生れ、或は惡所に在つて出づること能はず。爲に説く、汝等、務めて善事を行ひ、神を崇め、祖を敬ひ、慈悲を専らにし汚行を去り、常に和合を謀りて詐僞を爲すこと勿れ。時に墓地を清掃して祭祀を修せよ。靈魂は唯、清潔を好む。香華忘ること無く、名を唱へて肅拜せば、神も亦之を喜ぶ。永く其の家を呵護せん。盂蘭盆會に又來りて饗を享けん。冥令嚴格にして久しく止まること能はず、請ふ

たましひの怪談と迷信 其の二

此より辭せんと。言終つて兒亦睡る。少頃あつて覺めて本とに反へる。復、言ふ所を知らず。左助其の言を記して家に遺すといふ。是の事山寺氏の奎星録に載せたり。又之を略書す。

右の話は、冥界に去りし老父のたましひが、一時、陽世に還來して孫兒に假託して、死後の世界を説くといふ物語であるが、此の話の直ぐ後に左の評文を記してある。其の説明が又、甚、面白い。曰く

「龍仙子曰く、隨園新齊諧及び聊齋志異、紀曉嵐の雜誌等の載する所の幽冥の事、大率此れと相同じ、推して之を料るに復應に此の如くなるべし。世人謂へらく死者の再び來らずして、安否を告ぐる無き者なりと。蓋、冥法至嚴にして、妄りに陽世に出づるを許されず。故に善を

修し惡を行ふ者も未だ冥界に在つて其の報を得ること如何を知らざること、猶、僕妾の主を求むるがごときなり。先づ其の主に見え、一二日間にして其の命に従つて之を勸む。其の主、備ふべしとなす者は則媒介する者を召して契を書せしめ、而て後に一たび去つて衣服調具を携へて來る。縦ひ事故有りて故郷に歸省するも一月半歳の後に非んば、輒ち暇を得べからざるなり。死者の冥府に至るも亦然り。嘗て俱舍論を閱するに云く、人の五十歳は六天中の一晝一夜と爲し、四大王壽量は五百、等活地獄の一晝一夜と爲すと。華嚴經に曰く娑婆世界の一劫を安樂世界の一日一夜と爲し安樂世界の一劫を聖服幢世界の一日一夜と爲すと。然らば地獄に墮つる者、天堂に生るゝ者、其の門に入つて、未だ一日半時を経ざるに暇を乞ひて人間に歸省せんと欲するも、主、豈、

安ぞ之を許さんや。宜なるかな、一たび往く者に音信無きことや。聞く者曰く、死人に音信無きことは知了せり。敢て問はん、幽鬼の形を顯はして怨を仇家に報ゆるが如きは如何と。曰く是れ竊かに密處に匿れて冥吏の搜索を避くる也。故に白晝出でずして古井燈籠墓側柳蔭に潜み、常に冥吏の探偵を逃る。且、大姦深怨暴惡奇妬の者は、冥吏と雖、一時之を制すること能はずして、姑く其の行に任せ、怨解恨散するを待つて、拘引して以て其の罪に處す。此れ鬼の人に近きて害を爲す所以なり。然して數百年間、世に在りて禍福を爲す者は、未だ冥廳に到らざる者にして、冥府の晝夜、人世と相ひ異なり、故に人世に在つては緩慢となすも冥府に在つては微妙と爲すべく、暫く其の間を與ふる者か。是等の事往々計算に合はざる者有るは強ひて論ずる

こと能はざる也。

是の如き靈魂再來の思想は、古くより弘く行はれてゐる人類一般的の信仰で、世々云ひ継ぎ書き傳へて、近世になればなる程複雑な「たましひ物語」が生じる。余はかゝる類のことは更に別著中に論ずる豫定であるから、今は大略に止めて、左に夢の中にて亡者と語りし一實例をあげやう。

五 夢裡、亡者と語る

「敬神家の森谷翁は一夜、左の如き夢を見た——一昨年物故せられた第二世天輪教主今井新吾氏が、宛然、山伏の姿で、白装束を身に纏ひ、金爛の袈裟を打掛けて、其の立派なふさ／＼した房は一尺あまりも脊

たましひの怪談と迷信 其の二

の方へ垂れ懸つてゐる。教主は今や天上界に在る御身なれば、御生前にも増して有り難き御説話もあらうかと待ち構へて居ると、教主はつと脊を此方へ向けて、其の美々しき金爛の房を見よがしの態度をせらる。こゝに翁は「嘸かし天上と申せば結構な極樂な處で御座いませうと切り出せば、教主は始めて口を開く「いや／＼我は天界ではまことに忙しく暮す身である、乃至、諸天の神々も亦皆然り。一瞬の遊ぶひまとして無きものぞ」と。更に翁は「松田、川村の兩老人も熱心なる信者で御座いますから、どうぞ兩人への土産話として何か御教示を」と乞ふ。乃、教主の宣はく「聞け、浮世てふものは極樂と地獄とを前と後とにして一つの肩に擔うてゐる様なものである。所謂浮世は一方のみでは行かぬ、さればこそ善人も居れば、悪人も有り。然るに天上界では

皆働きづめなれば地獄などは存在し得ないものだよ。……凡そ世の中の事が思ふ通りに滑べりて行かぬのは、數へ方にでも現れてあるでないか。見よ、汝等が物を計算するに何と呼ぶ。ひとつ、ふたつ、みつ、よつ。それから「いつ」といつて「いつ」とは云はぬ。つまり「つが二度繰返へさねば調子がとれぬ。次に「む、つ、ななつ」となつて再「な」が二重となる。やっつの次は「このつ」で「こ」重る。如何に森谷、物は此の通りで何かと突き當る處があり引つ懸りがある程に。人はこゝに氣が附かぬのぢや。わしは昨年の秋に歌を示したのを覚えてゐるか。そら

めでた／＼の若様さまよ

コリヤ／＼若松さまよ

かはの丈夫な杵松様と

西田の森で八十八様に

搗いて貰へば餅になる。おもしろや

といふ歌ぢや。あの松とは五葉の松を指したので、又此れは「御用の待つ」ともなるのぢや。神の御用を待つといふ意ぢや程に、然らば五葉とは何か、外でもない。信者の中でも一番熱心な川村、松田、西田、若松、森谷の五人を申すのである——いざ醒めよ、一度目醒めて後に再、説かう程に」と仰せられた。故に一度覺醒後口嗽ぎ、線香を燻らせて就眠し、かの有り難き御垂示の續きを望んだが、どうも目が互えて眠られず、此の夢は是を以て終りとなつた。

——因に森谷氏が夜中かゝる夢を見たる時は正に、四里を隔てた針

が別所天輪教講社では同夜の集會席上に松田老翁と某氏との間に大に五穀の神様のことにつき議論盛なりし由——

此の話の如きは、平素、靈魂に關して上掲説話に類するものを聞き知つてゐるから睡裡の夢魂が之を想起したまでであらう。而て西方浄土より歸來して、同胞に其の莊嚴を案内する譚は、袁中郎の西方合論巻頭に出てゐる。余は拙著夢學の第七四三頁に引用したから参照あれ。

永き戀、早き死

高山樗牛

此の生の憂苦を免るゝ道たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然らざれば狂。あゝ吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎

たましひ

癡狂院

高山樗牛

世界は悪者に負ふ所あるが如く、又深く狂者を徳とせざるべからず。

ナザレの故園に歸り、以賽亞六十一章の破題を吟じて是の録さされたる事今日汝等の前に應へりと呼びし時誰かイエスを狂者なりとせざるべき。龍の口に引かれむとするや、赤橋の前に立ちて八幡大菩薩の緩急を罵りたる時日蓮を狂者と思ひしものは獨り彼の法敵のみに非ざりき。彼等をして今の世にあらしめよ、癡狂院裏の一患者として待遇せらるゝ外何處にか救世主あらむ、何處にか釋尊の行者あらむ。

識する者曰く、癡狂院は是れ無數の凡人が其の平等主義の保護の爲に設けたる恰好の武器也と。好談諺亦多少の眞理無しとせず。

第八編 狂へるたましひ

一 巢鴨病院の夜の廻診

1 夜の狂人

「寒月に白齒むき出す狂女かな」

此の句の眞味はとても實見したものでなければ分るまい。ひるはひねもす夢の如くに暮す彼等狂人が、夜はよすがら如何にして癡癡病院の一^や夜を明かすであらう。

嘗て文學趣味のいと深き我が一友人が、其の感想なりとて、次の歌を示した事がある。

狂ひ女と野獸の如く野にすまば

狂へるたましひ

せめて烈しき心足るらん

青春の血に燃ゆる其の頃であつたればこそ、こんな思想が起り得たかも知れぬ。併しそれは、はや數年前のことである。彼も同じく醫科大學に入つて、また已に業を卒へた。今若し、彼が癲狂院内の實況を見て、而て後にやはり往時の空想を詠ひ得るか否かは最も大なる疑問である。顯基中納言は「罪無くて配所の月を見む」といひ梶牛は「永き戀か、早き死か、然らざれば狂」と言ひて、ともに人寰の俗臭を厭ひて幽寂夢幻の境涯を憧憬れしとはいへ、誰か「狂せずして癲狂院に一夜を明かさん」とを庶幾ふべき。乞ふ、試みに何人か之を志願せよ、而て彼は良教訓を感得するであらう。

2 癲狂院の夜の氣分

人も知る如く、東京の巢鴨病院の建築物は電車通りを距ること二三丁も奥に當り、後は郊外田端方面に接して、市中の喧噪とは没交渉である。晝間こそ見舞人や、入退院患者や、受診者の爲に繁忙ではあるが、已に當直者以外の醫員や事務員も退出し了りたる夕方は、寔に寂寥たるものである。夜の八時過ぎとならば、はや深夜の趣きがある。時に急に患者が亢奮叫喚して、看護人がバタ／＼と廊下を馳けめぐる音、これに驚かされて院内の何處からか、犬がけた／＼と吠え立てる聲に、一しきり騒がしく聞える。それも暫しの後は、復もとの寂寥に歸つて、一種の物凄さはひし／＼と身邊を襲ふ。時しも微か彼方の病室から、優しい聲で、アケテラン／＼、リコラン／＼レコ／＼／＼、リコラン、チヨコライト／＼、エンリンカン／＼、アケテ、イツシキ、エンリン、カン／＼

狂へるたましひ

と謠ふ者がある。これは六十二のお婆さんで此の歌は自分から歌ふのではない。遠くから電氣をかける者が有る爲に、先づだん／＼と身體がゆり動き出して、夫れから首が前後左右に回轉し來り、おしまひに右の歌が口から出るのであるさうな。成る程見てゐると、丸坊主の半白頭を頻りと打ち振つて、ニコ／＼笑ひ乍ら、ポコボン、ポコボンと間ひの拍子面白く唄うてゐる。

九時の鐘が鳴ると、愈々廻診の時刻である。看護婦長が醫局へ出頭して「御廻診を」と申出る。當直醫員は右手に認印を持ち、左手に聽心器を携へて廊下に出ると、組長は提灯を照らして先登に立ち、行く／＼「御廻診で御座います」と布令廻る。すると男の病室の方でも其の準備に掛り、又、事務課の當直員一名も之に加つて、總勢四人、薄暗き、長き廊

下を右に幾廻り、左に幾曲りして、其の夜の患者の容態を巡視廻診するのである。一巡するだけでも優に半時間はかゝる。

3 狂女の嫉妬と色情亢奮

斯ういふ廻診の時に或る醫員は不意の襲撃を蒙つて、全く面喰つた事がある。其の人は看護婦長の逐一、患者の病状を報告するのを聞きつゝ、彼の女と肩を並べて歩いてゐたので、此の時、早發性痴呆の一狂女は向ふの廊下の片隅に佇んで、じつとこつちを眺めてゐた。やがて四人の一行が其の前を通過する一刹那、己が身後にかはひ居たる一つの椅子をば、高く振り擧げしと見るや否やボカツと醫者の前頭へ投げ付けた。彼は氣の毒にも眉間に大なる裂傷を受けて一週間の程は日々細帯を頭に纏うて登院して居つた。

狂へるたましひ

すべて精神病患者は一般に男子よりも女子の方が嫉妬の情が強いやうである。又色情亢奮に於いてもさうで、緊張病の一患者、咲山の如きは、男の姿を見れば、ゲタ／＼笑ひながら抱き付く。看護婦が之を抑制しても其の手を振り拂つて、エッヘッへ、ゲタ／＼と笑ひつゝ後を追うてくる。又、破瓜病に罹つてゐる患者秋山は一夜どうしても己が寢所に就かずして、看護婦の寢室に侵入しようとする。つまり自分の亭主が其處に寝てゐるとの妄想からである。そして、どうなだめても聴き入れない。結局其のへやの戸を開けて見せて、始めて納得したのである。こんな風の子患者にも二種類あつて、其の一は上記の如き類は緊張病とか破瓜病等、即、總稱すれば早發性痴呆等の精神病者に多いので、其の高度の者は今日の何月何日なりや、乃至此處の何病院なるか、眼前

の醫員の何人なるかを辨へない。たゞ男子とさへ見れば亢奮するのである。又他の一は躁鬱病患者の躁病状態の場合、即、亢奮して騒ぎ立てたり、笑ひ叫んだりしてゐる時にも、其の相手の何人なるかをチャンと意識して居つて、己れの戀愛する男子には玉章や和歌の類を贈るのである。醫員の中でも、こんな患者に想はれた者が廻診の際は、ともしると引き止められて意外に廻診をひまどらせる事がある。

「先生、まア一寸お待ち遊ばせ。私ね、チヨイト、こんな歌が出来たんですの、

鴨巢よいとこ、朝霧夜霧、

忍ぶ戀路の顔かくす

どうです。面白いでせう、ホホホ、

狂へるたましひ

たましひ

いやな病室抜け出て、ソツと

好きな醫局へ忍び足

てな歌も、いゝぢやありませんか、ねえ。アラ、先生、知らないつて。いゝわ。でもチヨイとこつちへ入らつしやいな。私ねもつと外の歌を作つてよ

此の患者は二十六の美人で自身は新橋の藝者だと云はれ度いのであるさうな。斯かる患者に對しては看護人は成る可く亢奮させぬ様に注意して又平素も出来るだけ刺戟の寡い境遇に楹置し得るならば、亢奮發作の度も減じ得る。但、社會の刺戟劇しき中へ放てば間もなく病狀の戻る傾向がある。

4 悲惨なる痴呆状態

狂はば狂へ、せめて人格の斷片だも殘存して辻褃の合はぬうちにも其の歌に優しき戀を詠み、妄想に煩はされても其の振舞に人らしき態度のありてこそ、見舞ひに來る家族や、治療する醫師に多少の慰安を與ふるなれ。全く人格の統一力が支離滅裂して、事處人物の辨識も到底不可能なる患者に到つては、たとひ人の態を具へても已に人ならず。否、獸だも夏は尾を掉つて蚊を拂ひ、冬は巖屋に風を避けるものを。かの麻痺狂患者の如き——勿論必ずしも何人もが皆其の原因を彼自身の梅毒に有すとは限らないが、其の大多數は實に、彼等壯時の血氣に任せて賤業婦に接觸したりし應報にして、其の高度の痴呆に陥りしもの、乃至、亂暴狂躁の躁病者等に於いては、看護人の親切も忠言も聞かばこそ、朔風、肌を切る嚴寒の夜も、衣袂を寸斷し、夜具を破棄し、我が身は赤裸々の姿に

狂へるたましひ